

指定野菜の生産・流通・消費動向

令和2年7月

独立行政法人農畜産業振興機構



目 次

1	指定野菜とは	1	9	トマト	23
2	キャベツ	2	10	なす	26
3	ねぎ	5	11	ピーマン	29
4	はくさい	8	12	だいこん	32
5	ほうれんそう	11	13	にんじん	36
6	レタス	14	14	さといも	39
7	たまねぎ	17	15	ばれいしょ	42
8	きゅうり	20		参考野菜価格安定制度の概要	45

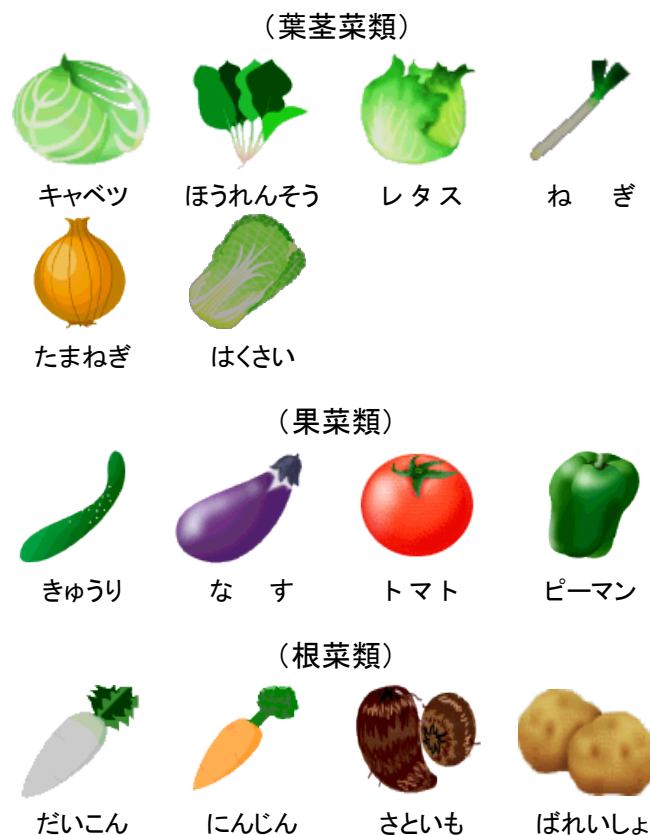
〈使用した資料〉

- | | |
|------------------|-------------------------|
| ・ 国内生産量（全国・指定産地） | 農林水産省「野菜生産出荷統計」 |
| ・ 輸入数量、輸入価格 | 財務省「貿易統計」 |
| ・ 国内価格及び入荷量 | 東京都「東京都中央卸売市場年報」 |
| ・ 国産と輸入品の出回り時期 | 農畜産業振興機構「ベジ探」、財務省「貿易統計」 |
| ・ 購入数量及び購入金額 | 総務省「家計調査報告」 |

1 指定野菜とは

- 「指定野菜」とは、全国的に流通し特に消費が多く重要な野菜で、キャベツ、はくさい、レタスなど14品目が指定されています。
- 指定野菜は、野菜全体の作付面積の約7割、出荷量の約8割、購入量の約7割を占めています。
- 全国の野菜指定産地（893産地）が指定野菜の全国出荷量の約7割を担う中核供給基地となっています。

○ 指定野菜14品目



○ 指定野菜の位置付け（平成30年）

品目	作付面積 千ha	出荷量 千トン	1人当たり	
			購入量 グラム	支出額 円
だ い こ ん	31.4	1,089.0	3,926	635
に ん じ ん	17.2	512.5	2,697	877
ば れ い し ょ	76.5	1,889.0	3,178	767
さ と い も	11.5	95.3	504	268
は く さ い	17.0	734.4	2,613	519
キ ャ ベ ツ	34.6	1,319.0	5,711	1,074
ほうれんそう	20.3	194.8	1,025	746
レ タ ス	21.7	553.2	2,108	861
ね ぎ	22.4	370.3	1,482	1,085
た ま ね ぎ	26.2	1,042.0	5,368	1,100
き ゆ う り	10.6	476.1	2,589	1,142
な す	9.0	236.1	1,389	679
ト マ ト	11.8	657.1	3,989	2,730
ピ ー マ ン	3.2	124.5	982	748
指定野菜計 (A)	313.4	9,293.3	37,561	13,231
野 菜 計 (B)	464.1	11,197.0	55,470	24,257
(A) / (B)	68%	83%	68%	55%

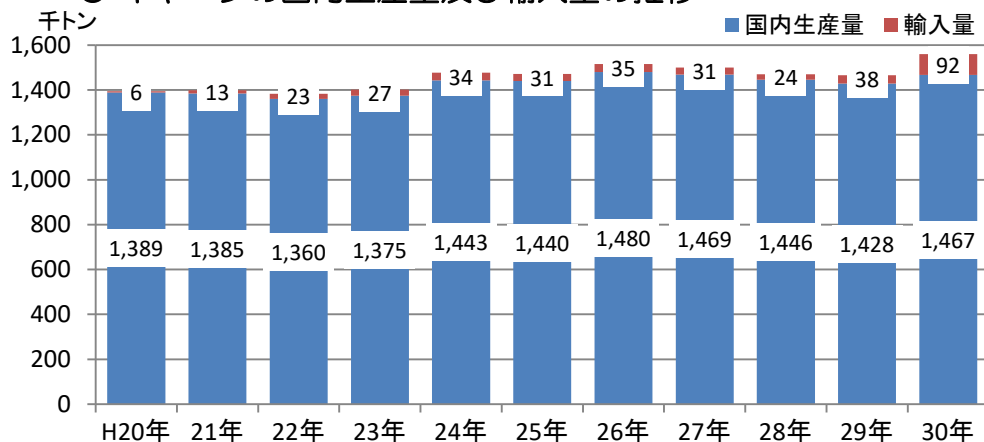
資料：1 農林水産省「野菜生産出荷統計」
2 総務省「家計調査報告」

注意：野菜計は、作付面積・出荷量は、41品目の野菜計、購入量・支出額は生鮮野菜計である。

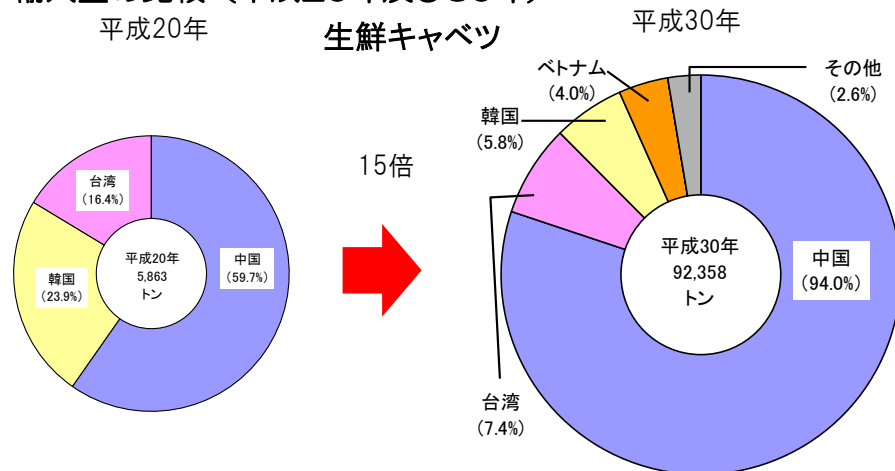
2 キャベツ

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、近年増加傾向（平成20年139万トン→平成30年156万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で94.1%と過去10年で最低。国内消費量の増加と国産価格の上昇により輸入量が増加（平成20年は99.6%）。
- 国内生産量は近年微増傾向（平成30年は147万トン、平成20年比で106%）。加工・業務用の取引が増えている中四国・九州等多くの県で生産量が増加。上位5県では、鹿児島県が平成20年に比べ9割、茨城県、群馬県が2割増加。愛媛県は倍増。
- 輸入量は近年は3万トンを上回っており、平成30年は天候不順等による国産の出荷減で9.2万トンに急増。中国が9割を占める。国産が不作になると増加（平成30年の1～4月）。

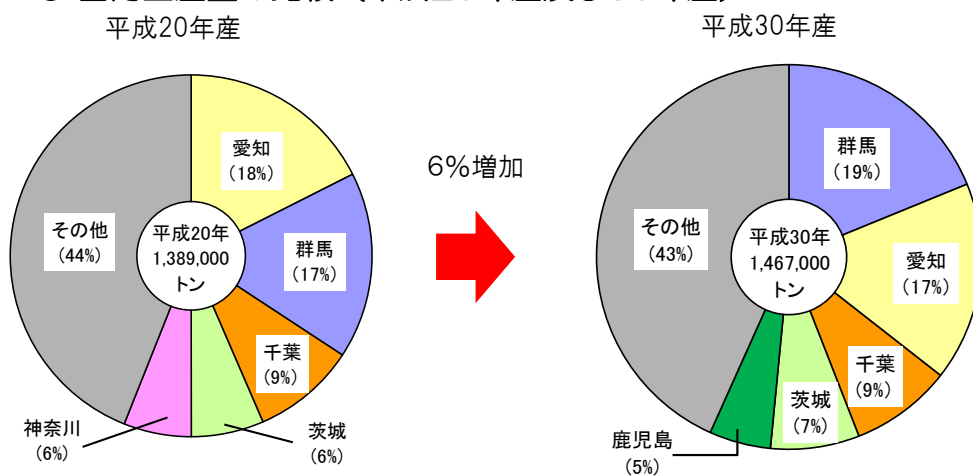
○ キャベツの国内生産量及び輸入量の推移



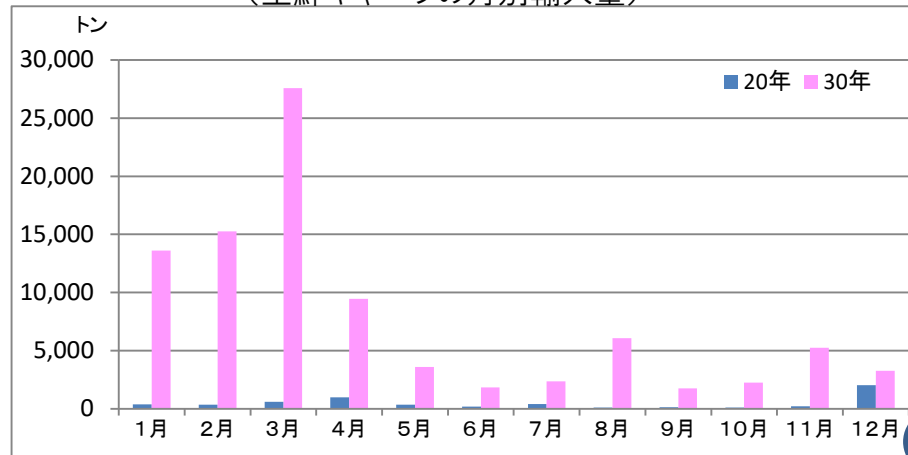
○ 輸入量の比較（平成20年及び30年）



○ 国内生産量の比較（平成20年産及び30年産）

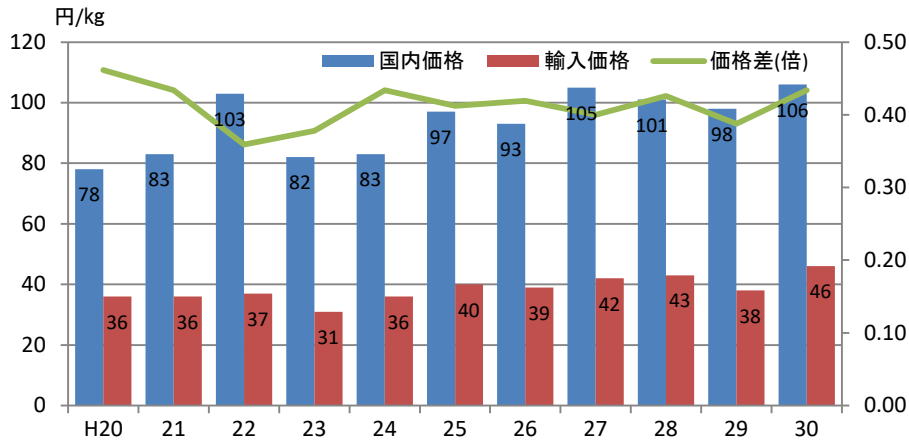


（生鮮キャベツの月別輸入量）



- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は、46円/kgで国内価格106円/kg（東京都中央卸売市場の卸売価格）の4割程度。
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、19.4万トンで平成20年に比べて増加（平成20年比110%）。県別では、長野県（同353%）、群馬県（同136%）及び茨城県（同121%）が大きく増加。
- 加工・業務用需要が増加。外食・中食企業の基本食材として使われることが多く、巻きが固く歩留まりがいい冬系（寒玉）の国内生産量が増加。中国産は周年で輸入されているが、卸売市場にはほとんど入荷されず、多くは直接加工・業務用に仕向けられている。

○ 国産キャベツと輸入キャベツの価格の比較

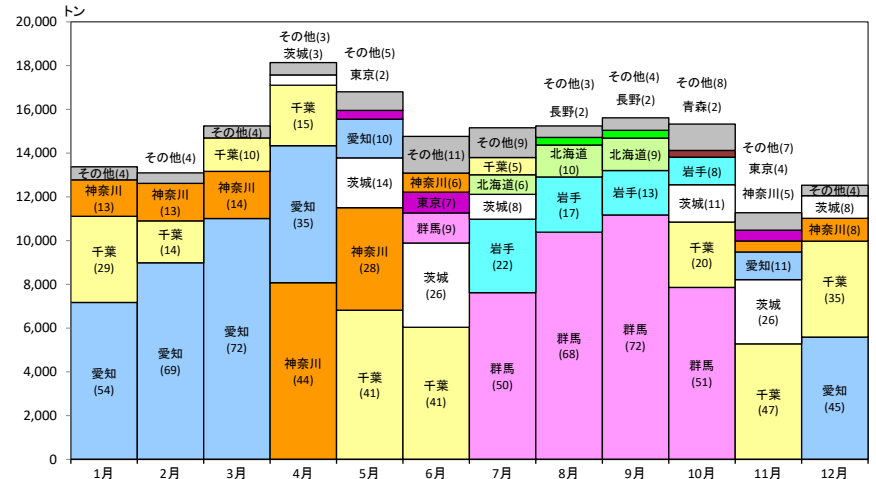


○ 国産キャベツと輸入キャベツの出回り時期

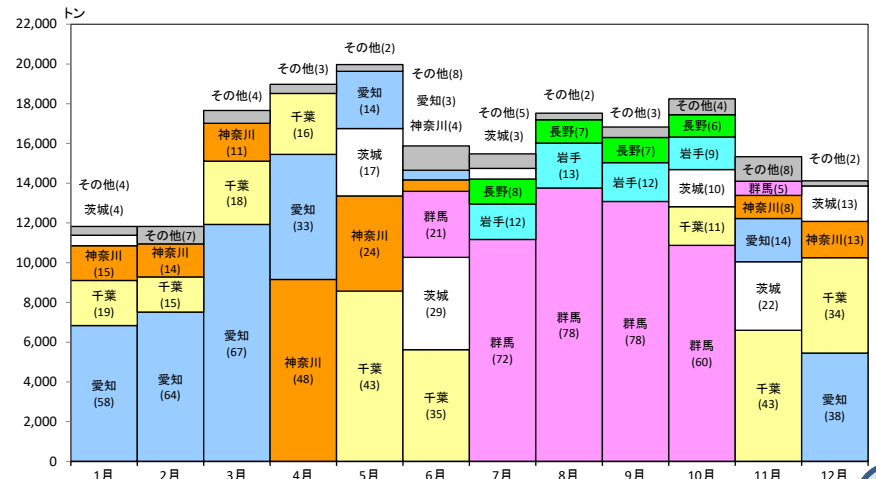
産地等 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
群馬県						←	→					
愛知県	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
千葉県	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
中国	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
ベトナム	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←

○ 東京都中央卸売市場の入荷量

平成20年

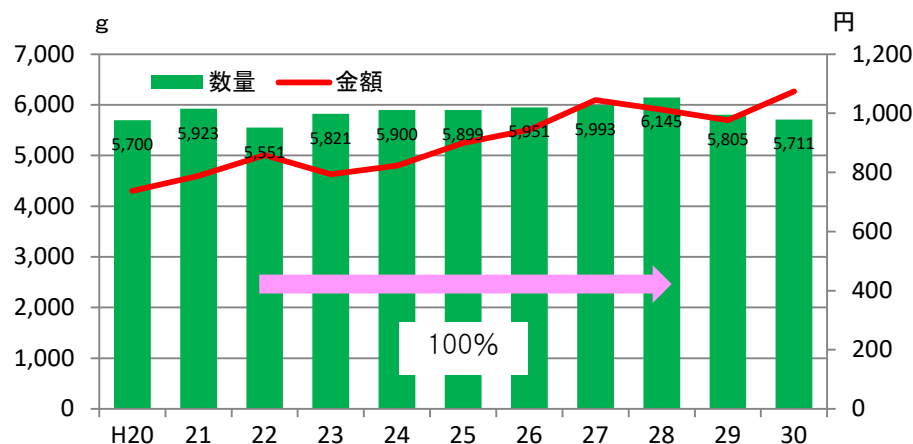


平成30年



- 1人当たり年間購入数量は、この10年間6,000グラム前後で推移し平成30年は5,711グラム。野菜の中で最も購入量が多く、販売価格に関係なく安定している。加工された千切りキャベツも含まれており、1人当たり年間の購入金額は上昇している（平成30年1,074円）。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は101%（17,640ha）、出荷量（81万トン）は103%とそれぞれ増加。夏秋キャベツの約8割が指定産地から出荷されている。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは作付面積で51%、出荷量で61%を占める。

○ キャベツの年間購入数量と購入金額の推移



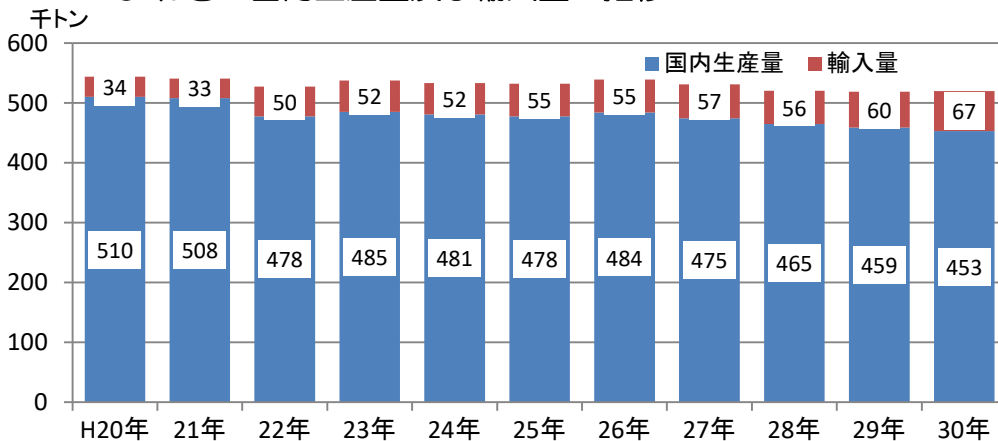
○ キャベツにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年				(単位:ha、t)	
	作付面積		出荷数量			作付面積		出荷数量	
	全国	指定産地	全国	指定産地		全国	指定産地	全国	指定産地
春	8,840	(38.8%) 3,430	316,900	(46.9%) 148,700	春	9,040	(37.9%) 3,430	340,600	(43.5%) 148,200
夏秋	10,200	(63.7%) 6,500	399,400	(80.8%) 322,600	夏秋	10,200	(65.3%) 6,660	447,900	(79.4%) 355,600
冬	14,000	(53.4%) 7,470	491,700	(63.8%) 313,600	冬	15,400	(49.0%) 7,550	530,100	(57.1%) 302,900
合計	33,000	(52.7%) 17,400	1,208,000	(65.0%) 784,900	合計	34,600	(51.0%) 17,640	1,319,000	(61.2%) 806,700

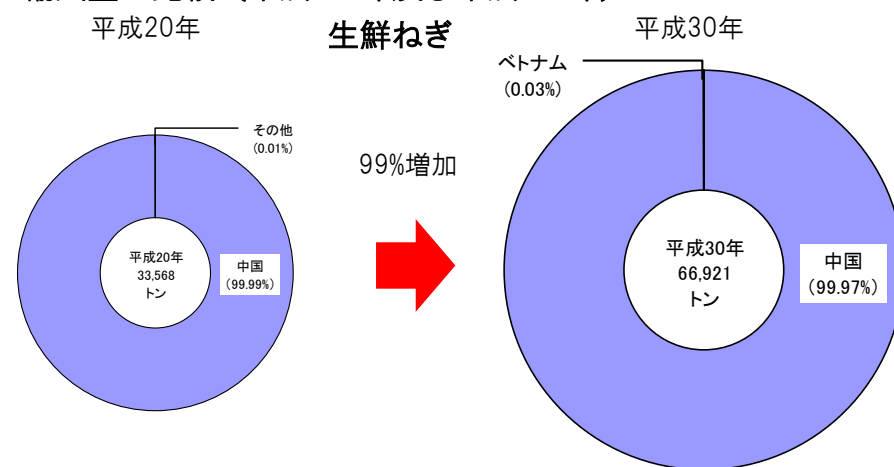
3 ねぎ

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、近年微減傾向（平成20年54.4万トン→平成30年52.0万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で87%と低下傾向（平成20年は94%）。
- 国内生産量は近年微減傾向（平成30年は45.3万トン、平成20年比で88.8%）。上位5県では、茨城県以外は減少。
- 平成30年の輸入量は平成20年比で約2倍。主な輸入先国は中国で、平成20年1月の中国産ギョーザ事案の発生により一時輸入量が半減したものの、増加に転じ平成19年以前の約9割の水準まで増加。主に加工・業務用として輸入されているが（白ねぎが主、近年は薬味用の刻み青ねぎも増加）、国内生産量の減少も一因と考えられる。

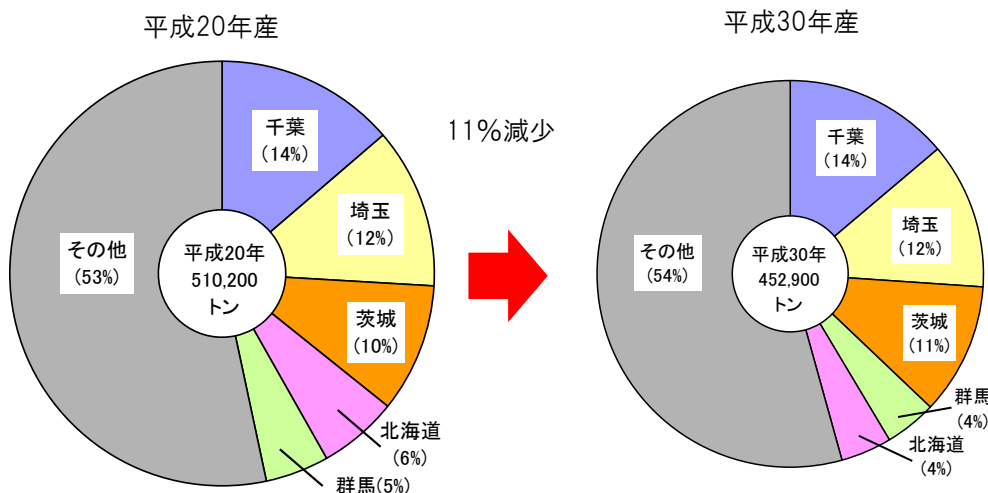
○ ねぎの国内生産量及び輸入量の推移



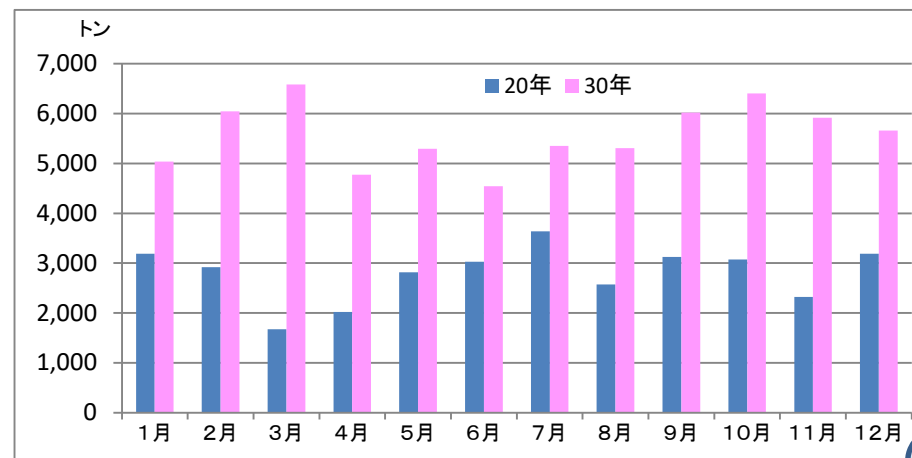
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）

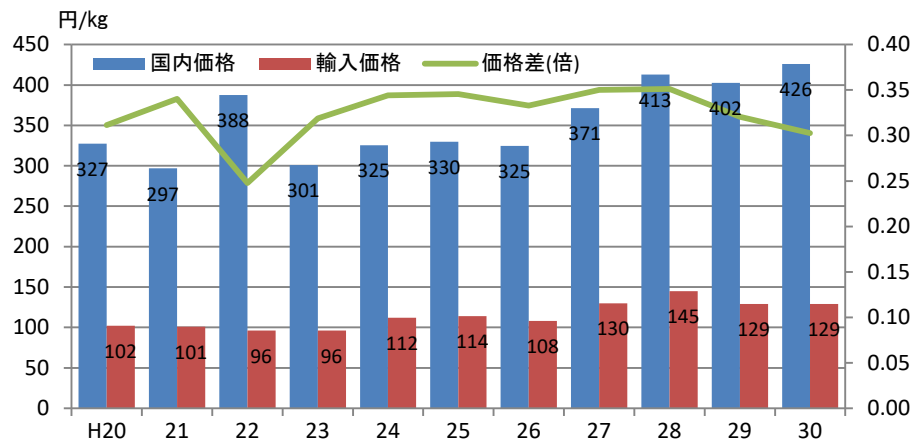


（生鮮ねぎの月別輸入量）

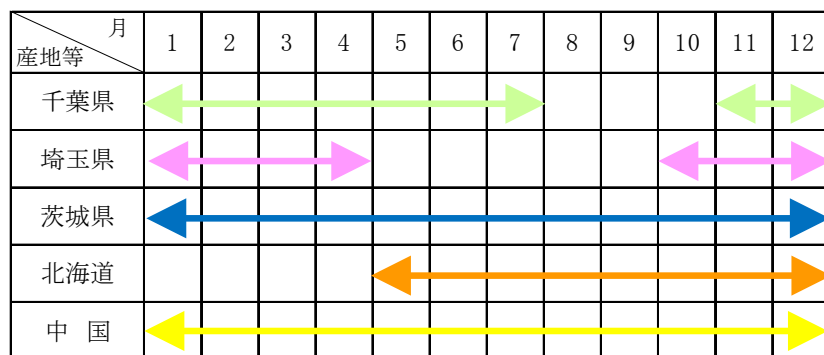


- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は、129円/kgで国内価格426円/kg（東京都中央卸売市場の卸売価格）の3～4割程度で、指定野菜の中で比較的内外価格差が大きい品目。
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、5.7万トンで平成20年に比べて減少（平成20年比85%）。県別では、秋田県（同141%）、栃木県（同113%）が近年大きく増加。

○ 国産ねぎと輸入ねぎ（生鮮）の価格の比較

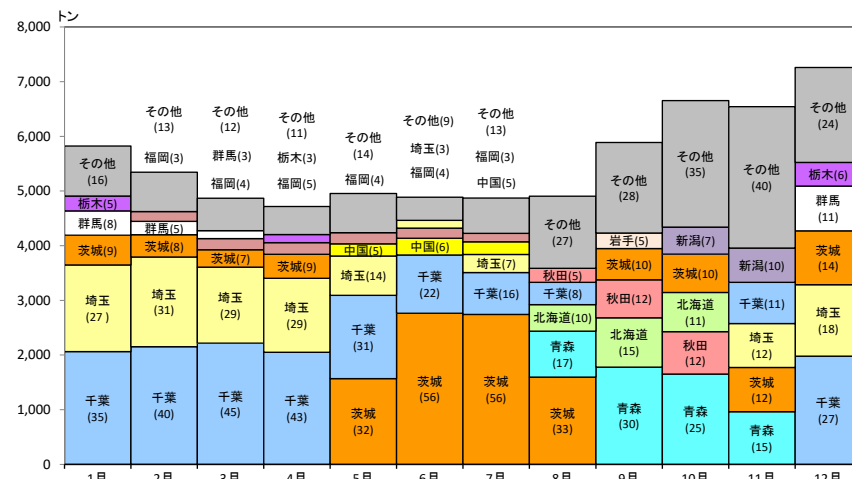


○ 国産ねぎと輸入ねぎ（生鮮）の出回り時期

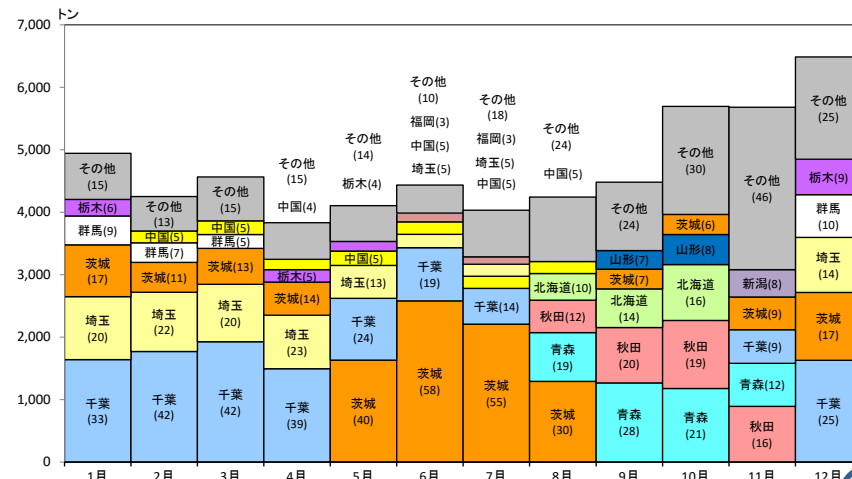


○ 東京都中央卸売市場の入荷量

平成20年

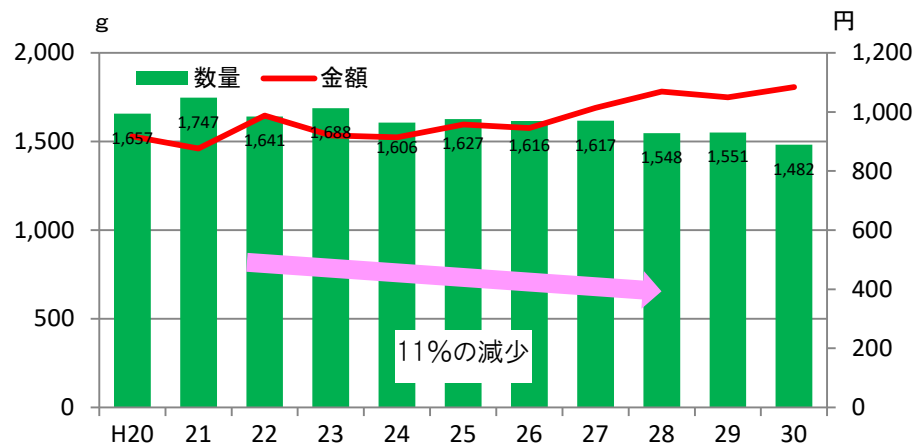


平成30年



- 1人当たりの年間購入数量は、近年は1,600グラム前後で推移していたが、平成30年は価格高騰により大きく減少し1,482グラム。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は108%（6,005ha）、出荷量は101%（11.4万トン）とそれぞれ増加。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で27%、出荷量で31%を占める。

○ ねぎの年間購入数量と購入金額の推移



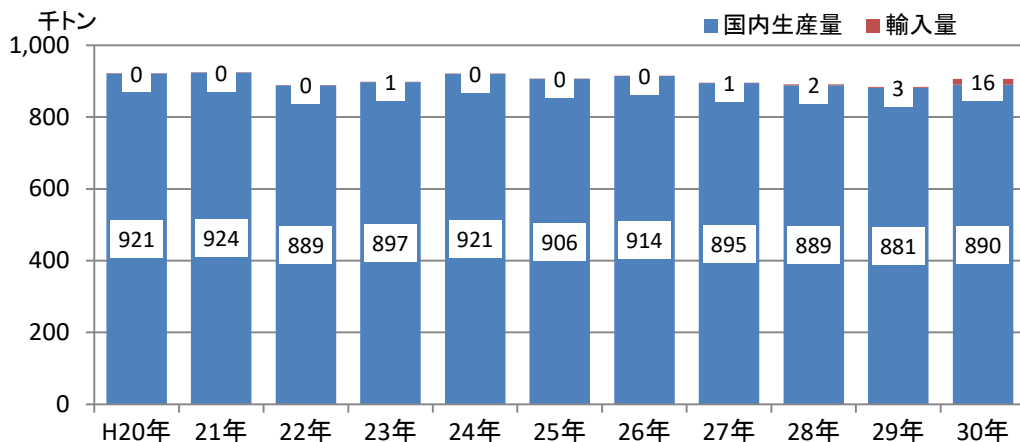
○ ねぎにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年				(単位:ha、t)	
	作付面積		出荷数量			作付面積		出荷数量	
	全国	指定産地	全国	指定産地		全国	指定産地	全国	指定産地
春	3,390	(14.9%) 505	74,600	(18.4%) 13,700	春	3,430	(22.3%) 765	68,700	(24.0%) 16,500
夏	5,070	(25.6%) 1,300	84,400	(30.9%) 26,100	夏	4,920	(27.2%) 1,340	76,600	(33.7%) 25,800
秋冬	14,500	(25.7%) 3,730	241,200	(30.6%) 73,800	秋冬	14,000	(27.9%) 3,900	225,100	(32.1%) 72,300
合計	23,000	(24.1%) 5,535	400,300	(28.4%) 113,600	合計	22,400	(26.8%) 6,005	370,300	(30.9%) 114,600

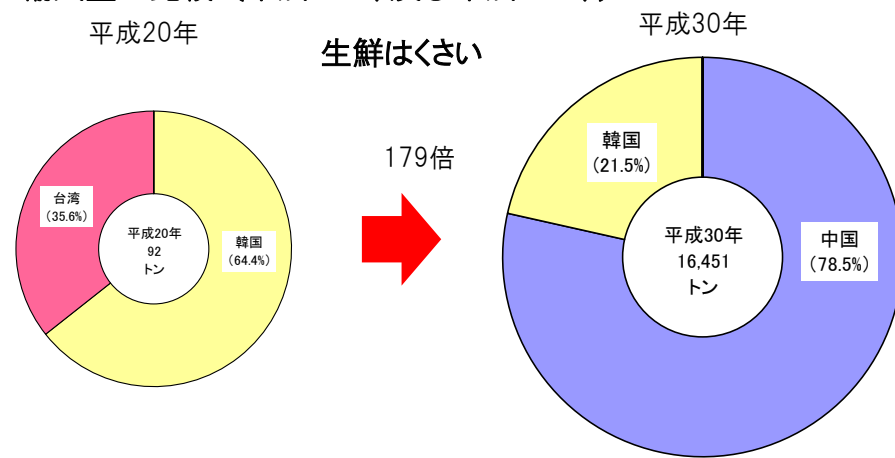
4 はくさい

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、近年90万トン前後で推移（平成20年92.1万トン→平成30年90.6万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、ほぼ100%で推移。
- 国内生産量はやや減少傾向（平成30年は89.0万トン、平成20年比で97%）。北海道及び東北産の生産量が減少したことが要因。上位5県では、長野県、群馬県及び茨城県が約1割増加。北海道は約4割減少。
- 輸入量は国内の不作時以外は非常に少なく、国産が不作になった年に加工・業務用（主として漬物用）として輸入されている（平成28年の10～12月、平成30年1～4月）。

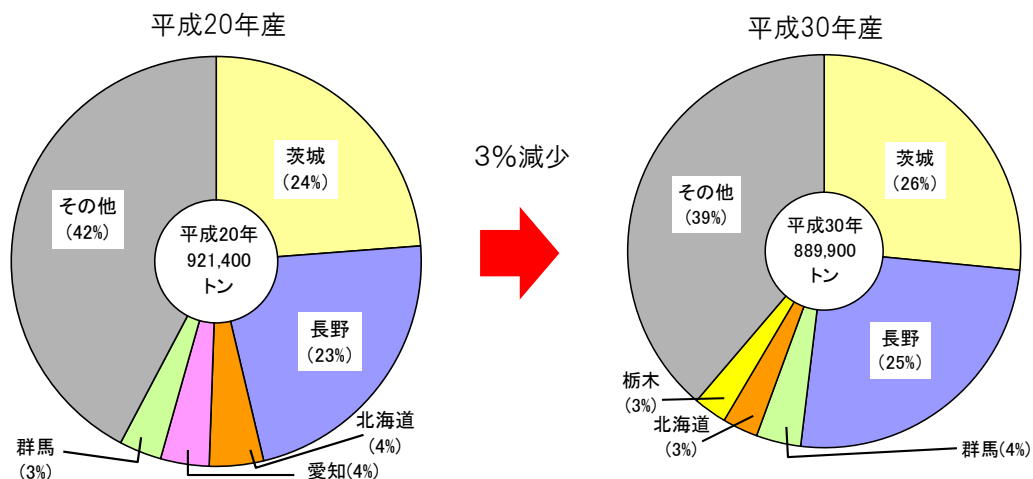
○ はくさいの国内生産量及び輸入量の推移



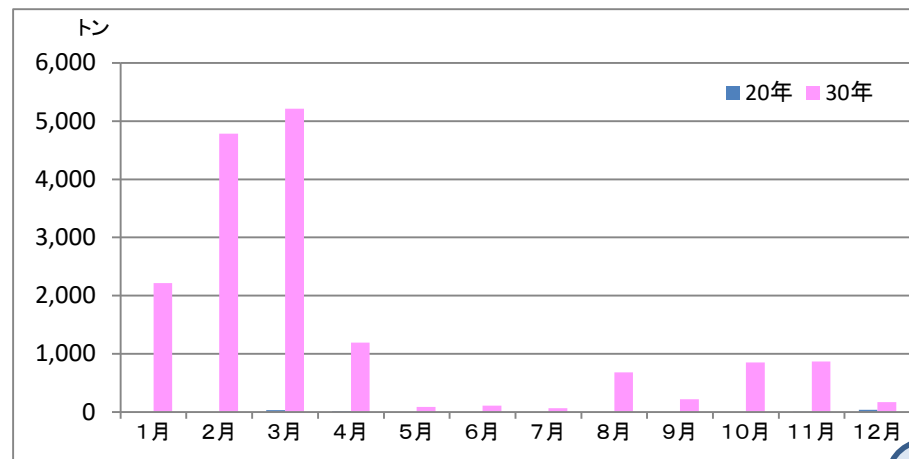
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）

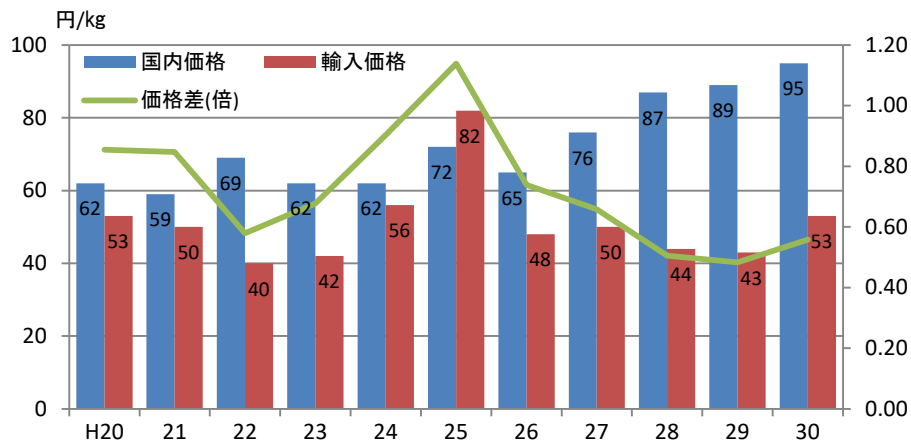


（生鮮はくさいの月別輸入量）

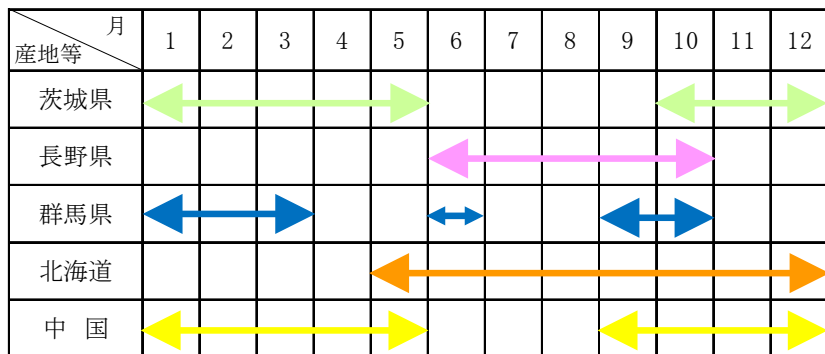


- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は53円/kgで、近年国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の5割～6割程度。
- 輸入品は、卸売市場の入荷は少なく、主に漬物用原料用に仕向けられている。
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、12.7万トンで平成20年比べて増加（平成20年比116%）。県別では、長崎県（同302%）、長野県（同142%）及び兵庫県（同125%）が大きく増加する一方、埼玉県、愛知県及び岩手県が大幅に減少。

○ 国産はくさいと輸入はくさい（生鮮）の価格の比較

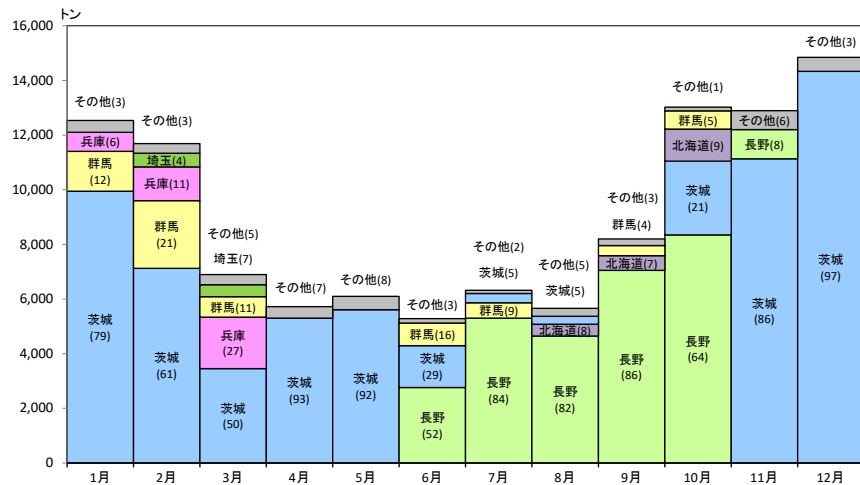


○ 国産はくさいの出回り時期

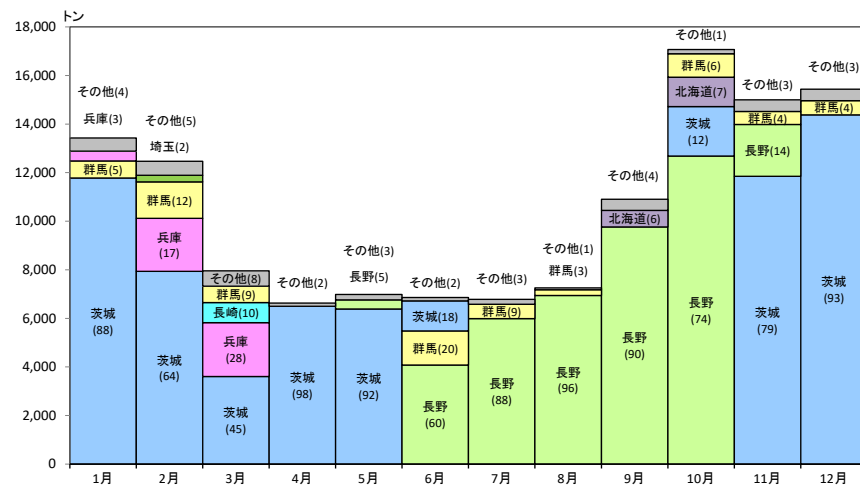


○ 東京都中央卸売市場の入荷量

平成20年

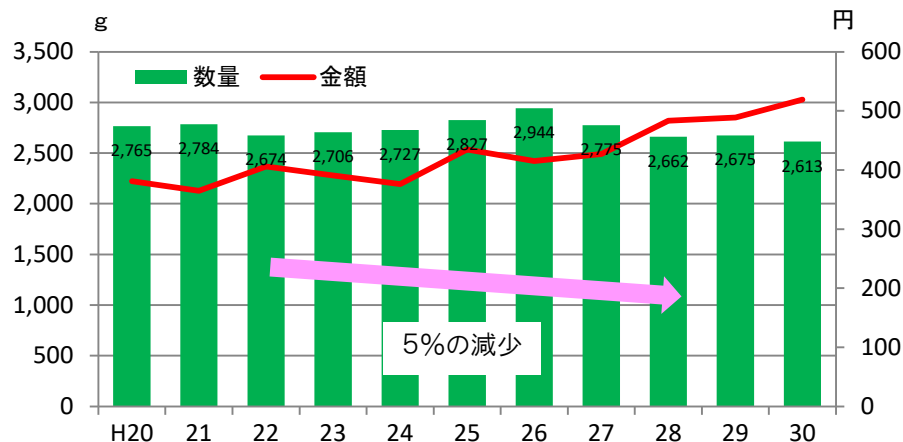


平成30年



- 1人当たりの年間購入数量は、平成26年の2,944グラムをピークに減少したが、近年は2,600～2,700グラム程度で推移。家庭で手軽に作れる鍋つゆの普及が一因。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は101%（6,353ha）、出荷量は106%（42.2万トン）とそれぞれ増加。夏はくさいは、9割以上が指定産地から出荷されている。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で37%、出荷量で58%を占める。

○ はくさいの年間購入数量と購入金額の推移



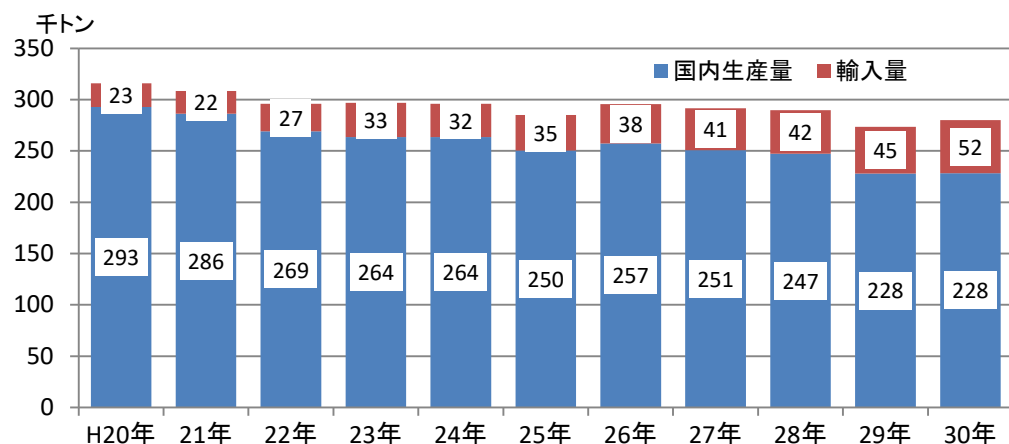
○ はくさいにおける指定産地の位置付け

平成20年					平成30年					(単位:ha、t)	
	作付面積		出荷数量			作付面積		出荷数量			
	全国	指定産地	全国	指定産地		全国	指定産地	全国	指定産地		
春	1,810	(47.0%) 851	94,700	(59.0%) 55,900	春	1,840	(48.5%) 893	106,900	(60.2%) 64,400		
夏	2,830	(74.2%) 2,100	157,200	(87.9%) 138,200	夏	2,420	(83.1%) 2,010	162,700	(92.4%) 150,300		
秋冬	14,000	(24.0%) 3,360	459,400	(44.3%) 203,600	秋冬	12,700	(27.2%) 3,450	464,800	(44.7%) 207,700		
合計	18,600	(33.9%) 6,311	711,400	(55.9%) 397,700	合計	17,000	(37.4%) 6,353	734,400	(57.5%) 422,400		

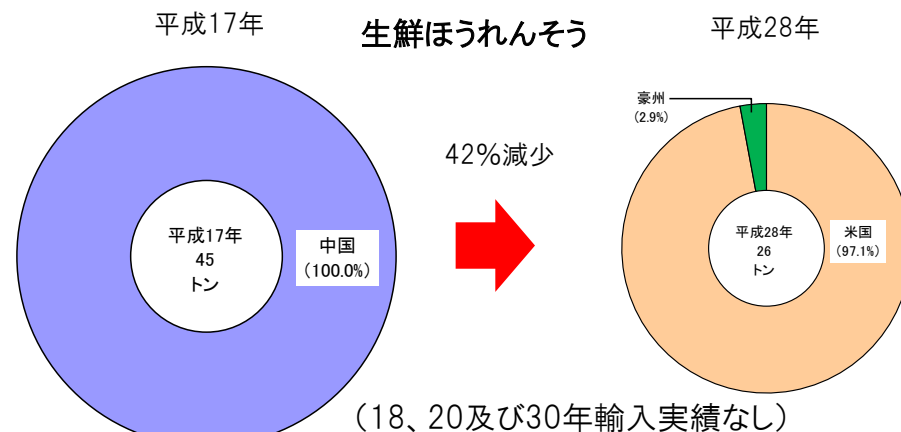
5 ほうれんそう

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、近年微減傾向（平成20年31.6万トン→平成30年28.0万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で82%と国産割合が低下（平成20年は93%）。輸入は、輸入先が中国から米国に変わった生鮮ではほとんどなく、冷凍ほうれんそうが年々増加（平成20年比224%）。
- 国内生産量は減少（平成30年は22.8万トン、平成20年比で78%）。多くの県で生産量が減少する中、熊本県（同比129%）、茨城県（同110%）及び宮崎県（同107%）では増加。

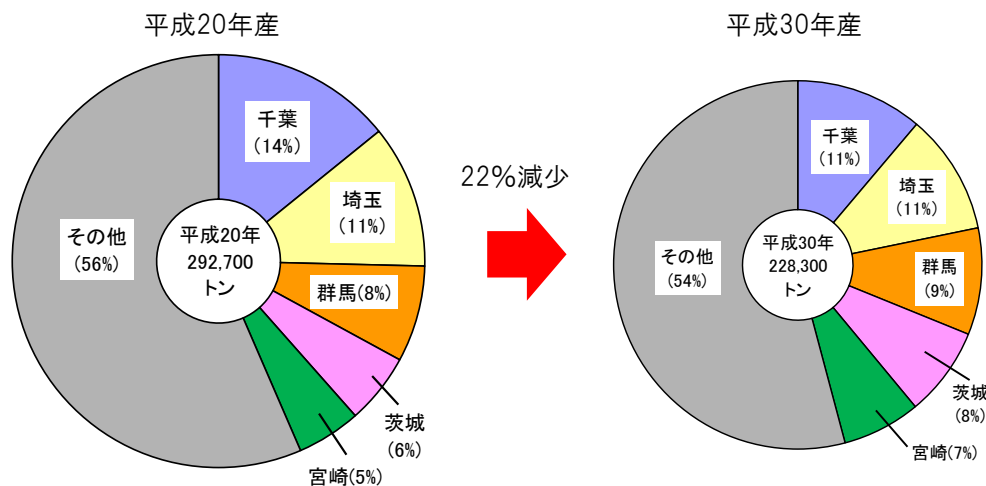
○ ほうれんそうの国内生産量及び輸入量の推移



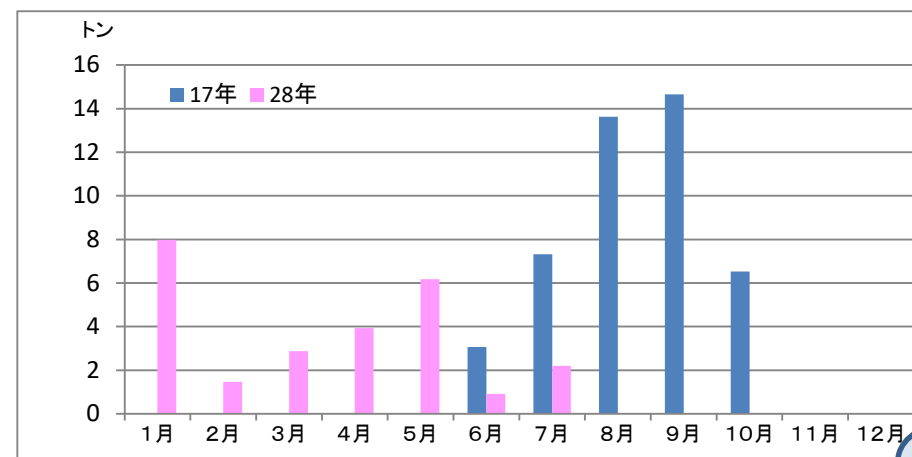
○ 輸入量の比較（平成17年及び平成28年）



○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）

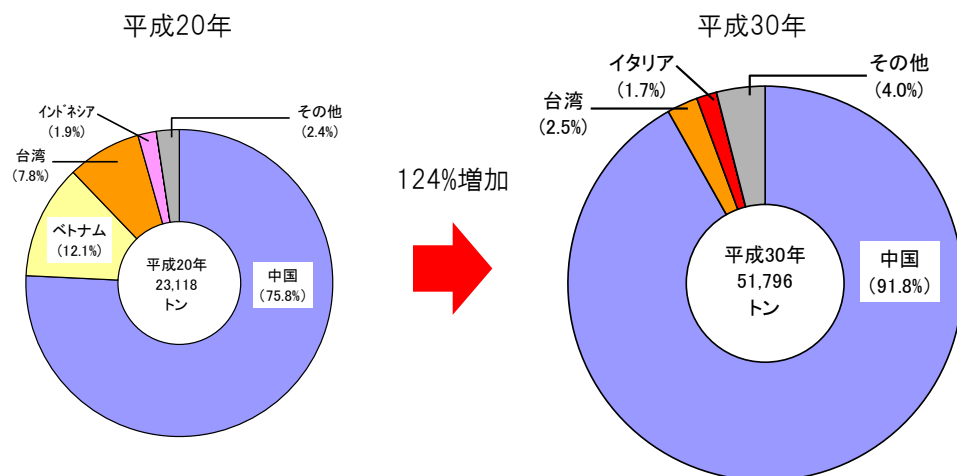


（生鮮ほうれんそうの月別輸入量）

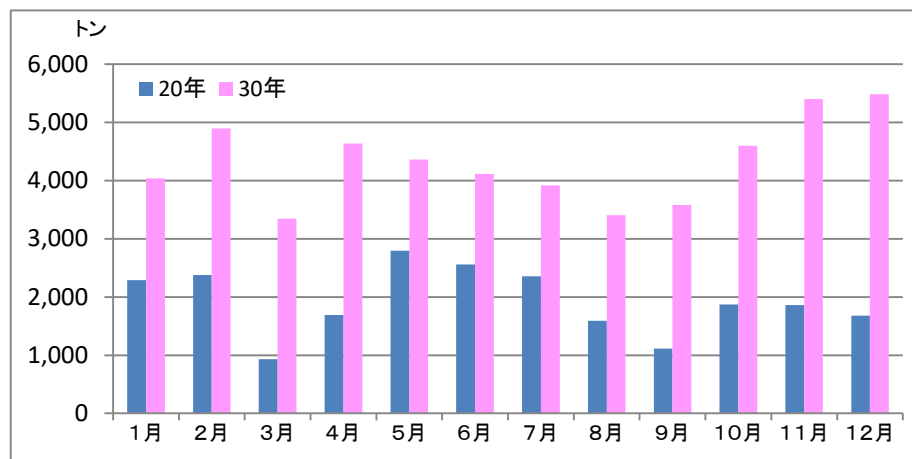


- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は164円/kg、国内価格542円/kg（東京都中央卸売市場の卸売価格）の3割程度。
- 冷凍ほうれんそうは、周年で量販店での販売や加工・業務用として輸入。平成30年の輸入量は、平成20年比べて2247%と大きく増加。中国の割合が大きく増加（平成20年76%→平成30年92%）。
- 宮崎県を中心に国産冷凍ほうれんそうの生産も年々増加。

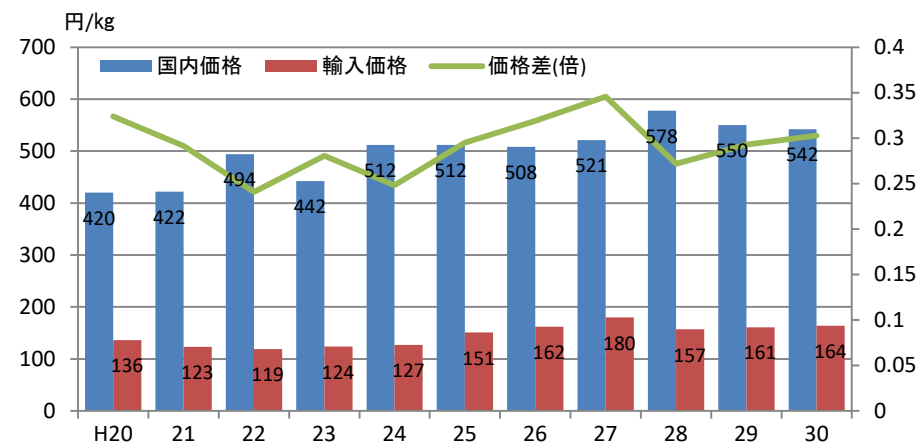
冷凍ほうれんそう



（冷凍ほうれんそうの月別輸入量）



○ 国産ほうれんそうと輸入ほうれんそう（冷凍）の価格の比較



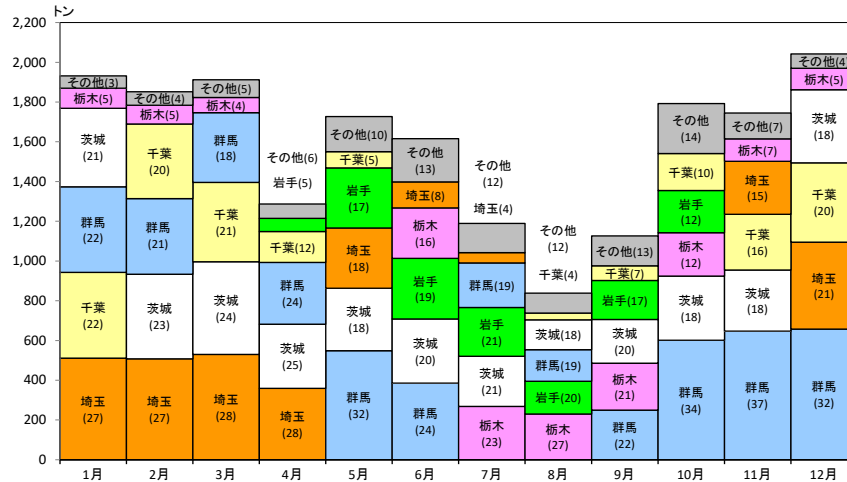
○ 国産ほうれんそうと輸入ほうれんそう（冷凍）の出回り時期

月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
千葉県	←									←		
埼玉県	←									←		
群馬県	←											
中国	←											
台湾	←											

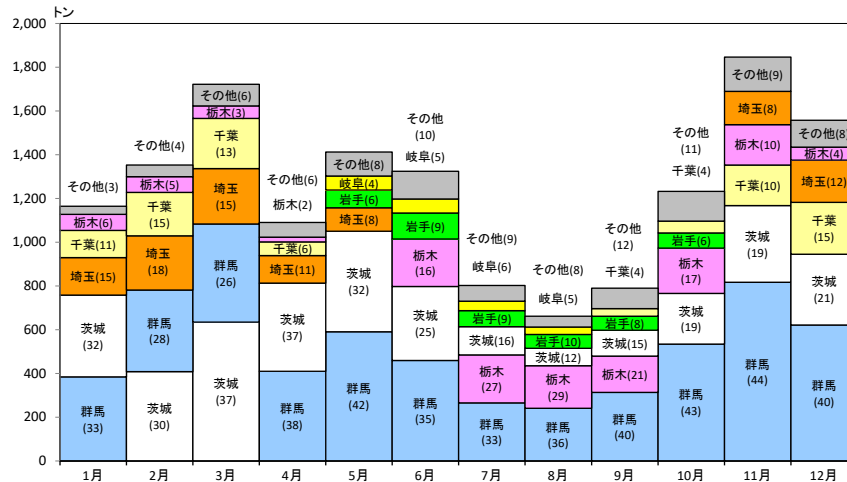
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、1.5万トンで平成20年に比べて大きく減少（平成20年比78%）。県別では、岐阜県（同154%）及び群馬県（同110%）が大きく増加する一方、岩手県、埼玉県、千葉県が大きく減少。
- 平成30年の1人当たりの年間購入数量は1,025グラムで、平成20年以降は減少傾向。一方、1人当たりの年間購入金額は700円前後で推移しており、価格によって購入数量が変化している。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は91%（6,440ha）、出荷量は90%（57千トン）と減少。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で32%、出荷量で29%を占める。

○ 東京都中央卸売市場の入荷量

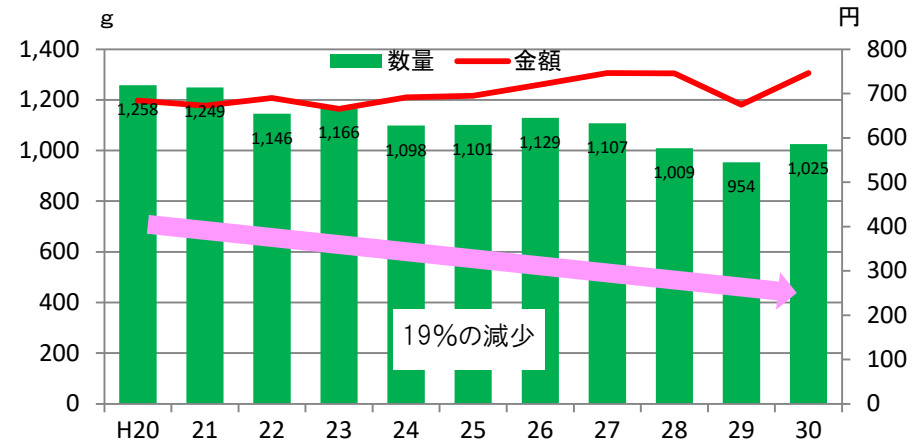
平成20年



平成30年



○ ほうれんそうの年間購入数量と購入金額の推移



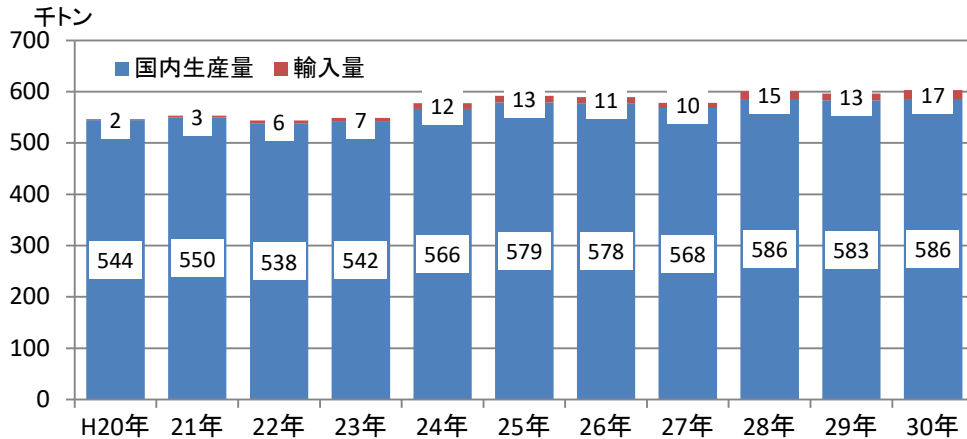
○ ほうれんそうにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年			
作付面積		出荷数量		作付面積		出荷数量	
全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地
22,500	(31.6%)	238,300	(26.7%)	20,300	(31.7%)	194,800	(29.4%)
	7,110		63,700		6,440		57,300

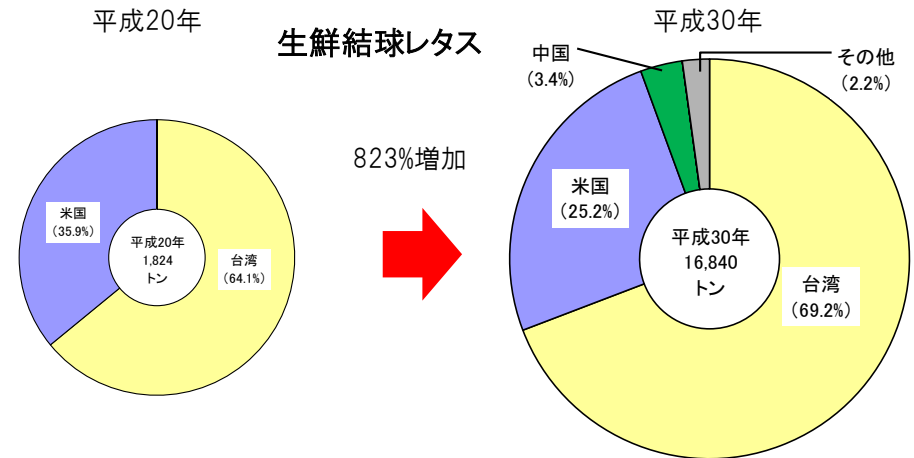
6 レタス

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、近年増加傾向（平成20年54.6万トン→平成30年60.3万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で97.1%と微減（平成20年は99.6%）。
- 国内生産量は増加（平成30年は58.6万トン、平成20年比で108%）。上位5県では、兵庫県以外の県で増加し、中でも群馬県（同134%）及び長崎県（同125%）は大きく増加。
- 輸入量は平成24年以降1万トン以上輸入されており、主な輸入先国は台湾及び米国。近年、結球レタスは、冬場（12月から3月）の国産が気象の影響で不作の場合が多く、外食などの業務用として台湾からの輸入が常態化。

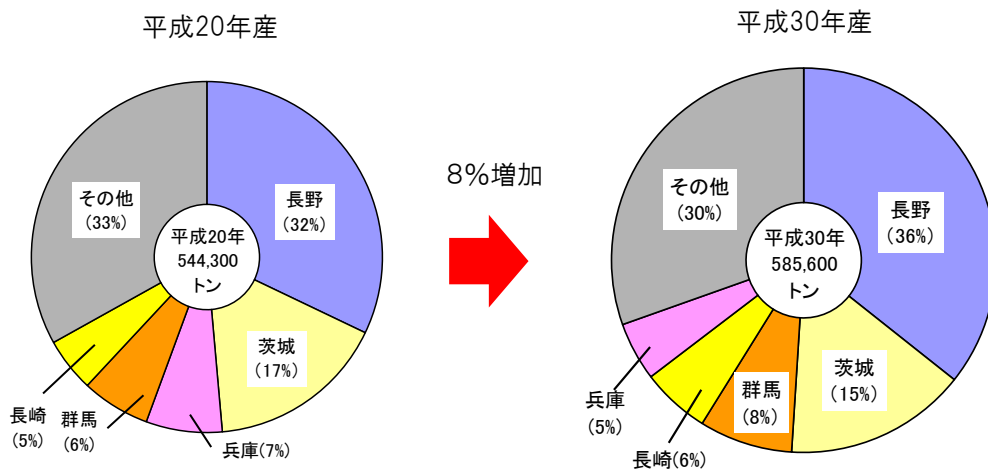
○ レタスの国内生産量及び輸入量の推移



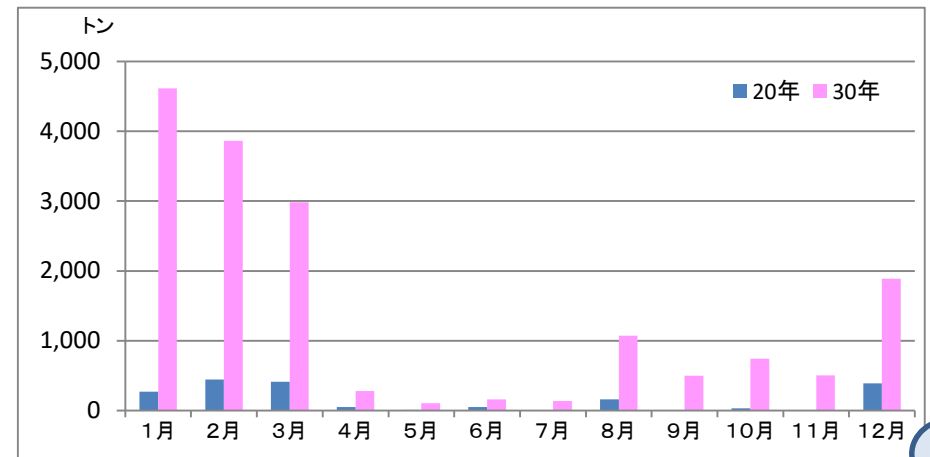
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



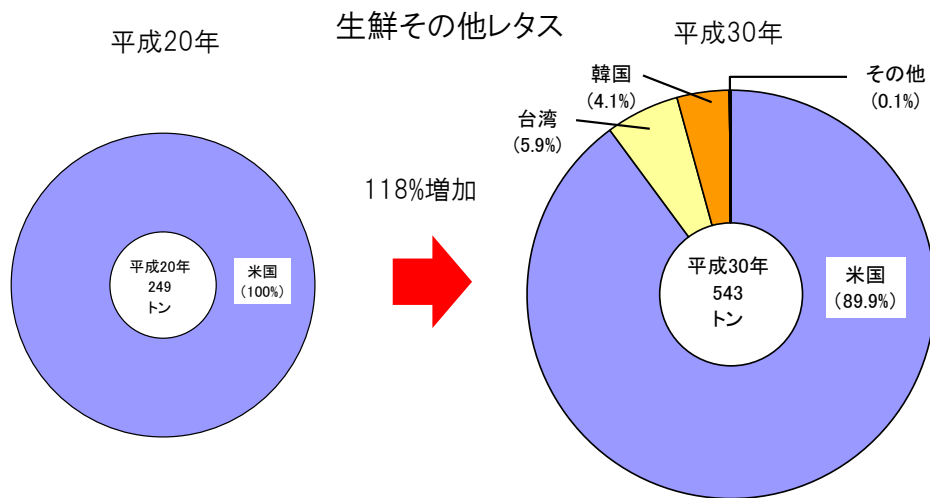
○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）



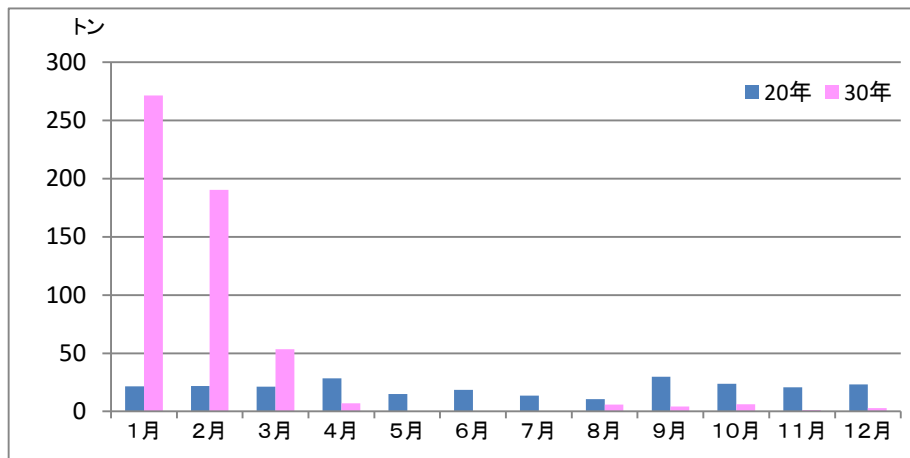
（生鮮結球レタスの月別輸入量）



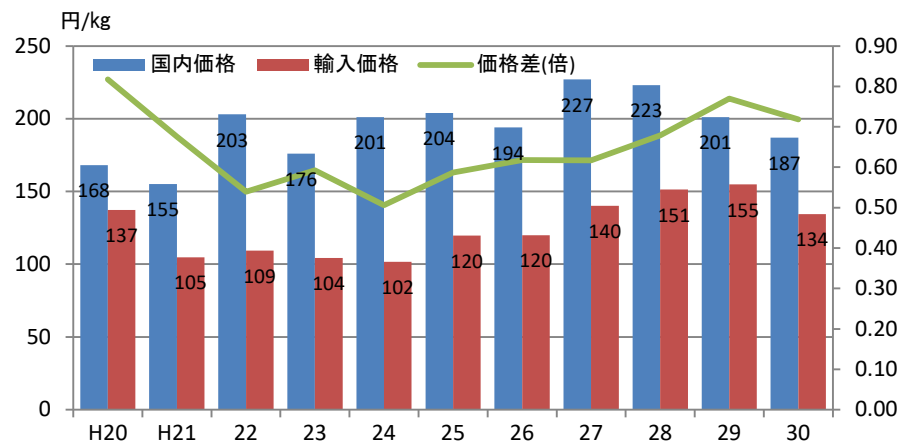
- 非結球レタス（ロメインレタス等）は、業務用として主に米国から輸入されている。また、中国からの輸入が減り、台湾及び韓国からの輸入が増加。
- 平成30年の生鮮レタス輸入価格（CIF価格）は134円/kgで、平成20年までは国産との価格差が小さかったが、平成21年以降は価格差が広がり近年は国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の7割程度で推移。平成21年以降価格が安い結球レタスの輸入が増加したことが要因。



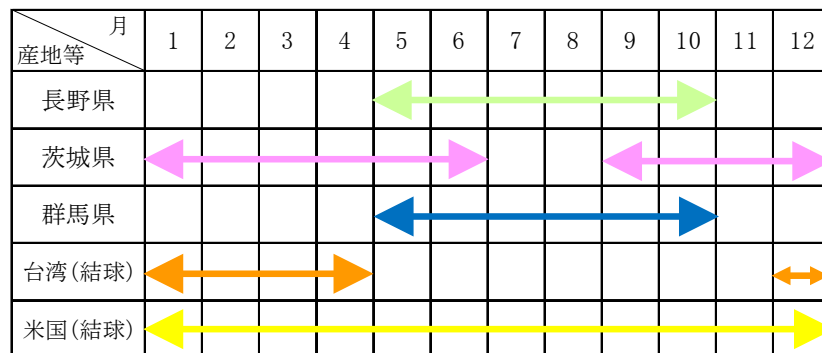
（生鮮その他レタスの月別輸入量）



○ 国産レタスと輸入レタス（生鮮）の価格の比較



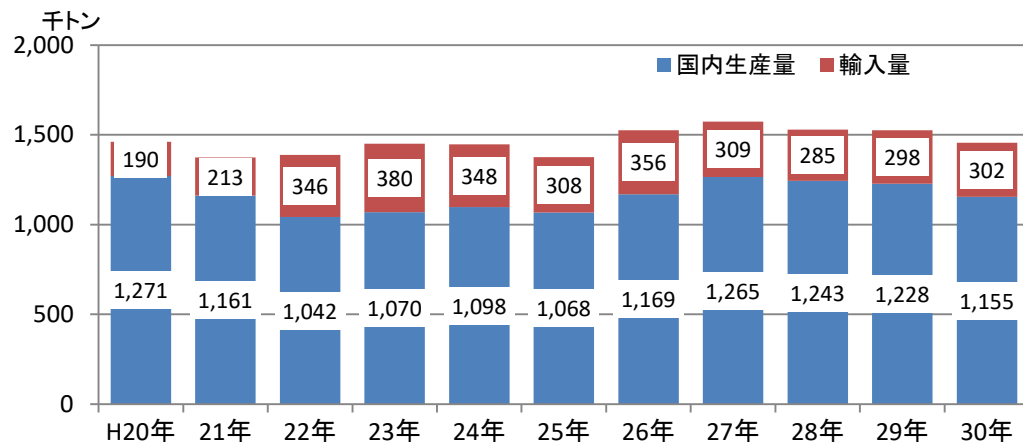
○ 国産レタスと輸入レタス（生鮮結球）の出回り時期



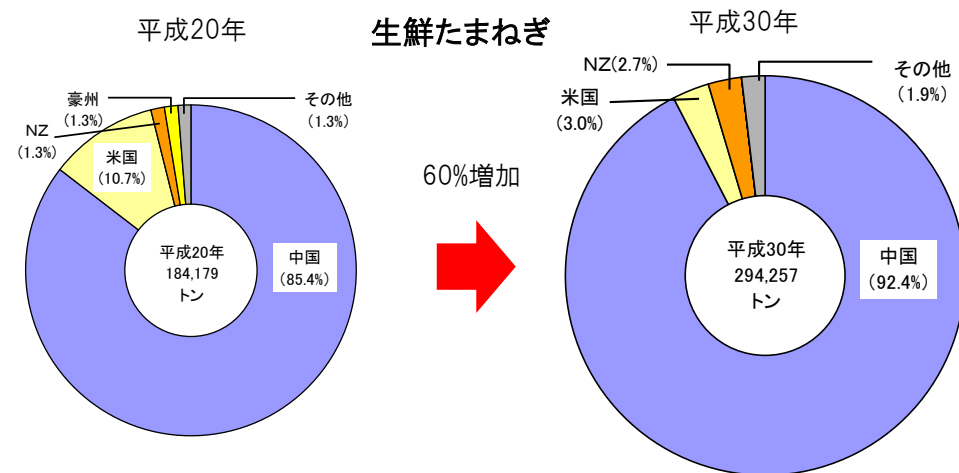
7 たまねぎ

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、年によって増減はあるものの、近年は150万トン前後で推移（平成20年127万トン→平成30年116万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で80%（平成20年は87%）と他の指定野菜に比べると国産の割合が低い。これは、北海道産の不作や業務用需要（むきたまねぎ）の増加等から、主に中国からの輸入が増加したことが要因。
- 国内生産量は近年100～120万トン程度で推移しており（平成30年は116万トン、平成20年比で91%）、全生産量の62%を占める北海道のシェアは横ばいで推移（平成20年比99%）。
- 平成30年の輸入量は平成27年並みの30.2万トン。輸入先国のシェアは中国が拡大する一方、米国及び台湾は縮小。

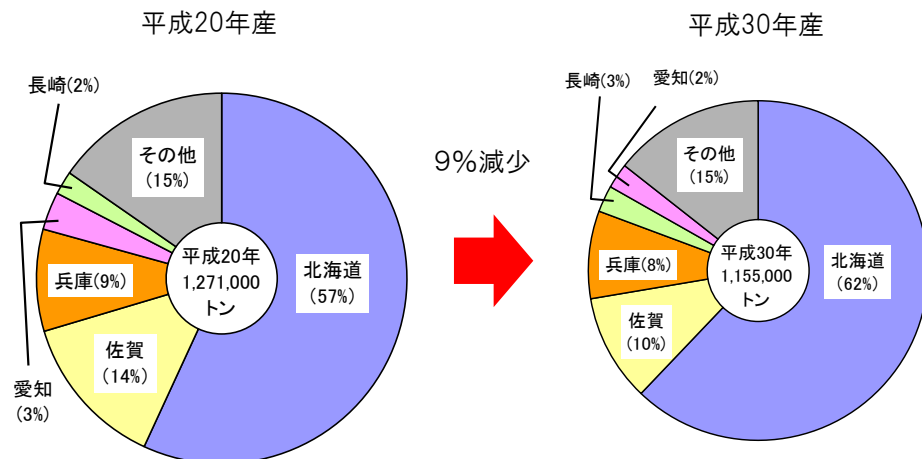
○ たまねぎの国内生産量及び輸入量の推移



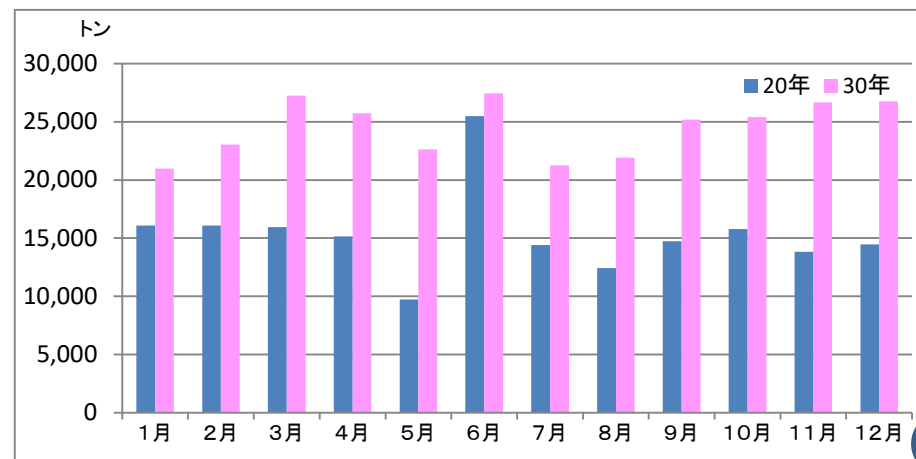
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）

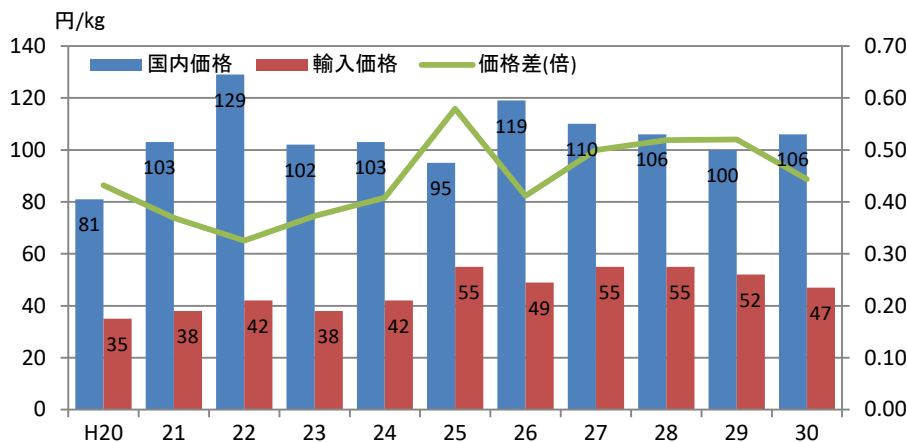


（生鮮たまねぎの月別輸入量）

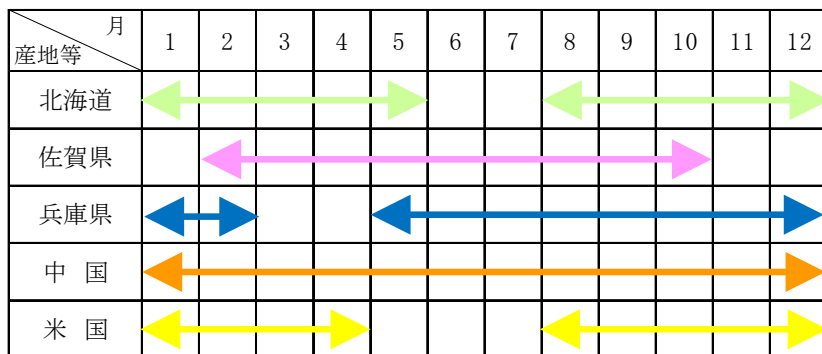


- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は47円/kgで、近年国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の5割程度。
- 中国産は、周年で輸入されており、卸売市場にも入荷しているが、主に加工・業務用（むきたま）として輸入されている。また、米国産は、主に8月～翌年4月に輸入されており、量販店などでも販売される。
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、12.6万トンと減少（平成20年比94%）。県別では、静岡県（同143%）が大きく増加。生育期の降雨、台風の影響から北海道産が減少したことから、中国産（同187%）の入荷量が大きく増加。

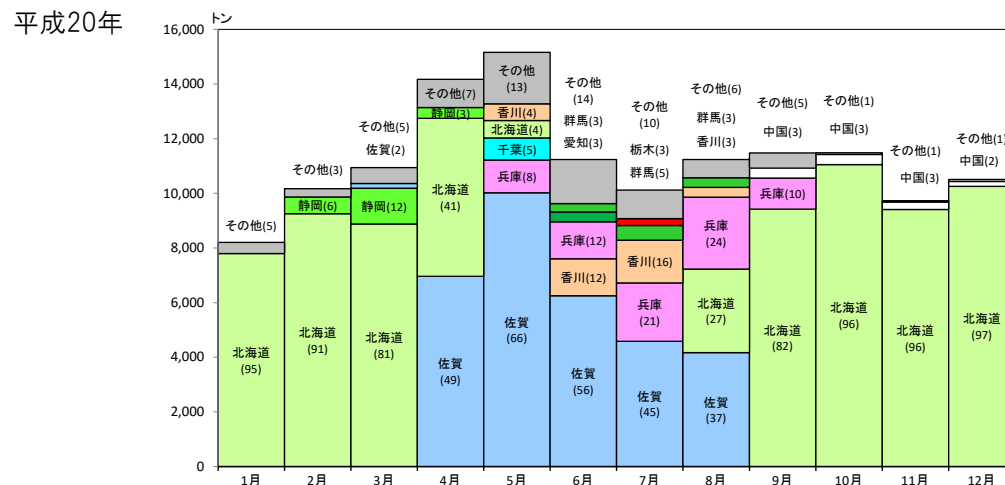
○ 国産たまねぎと輸入たまねぎ（生鮮）の価格の比較



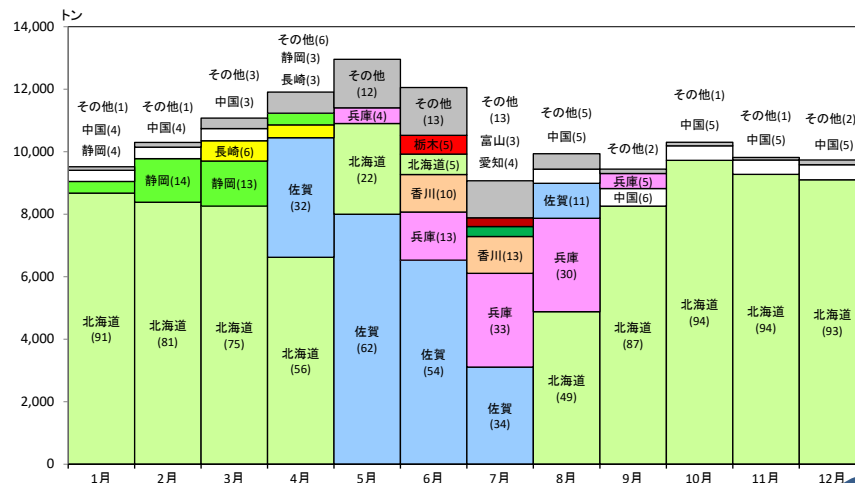
○ 国産たまねぎと輸入たまねぎ（生鮮）の出回り時期



○ 東京都中央卸売市場の入荷量

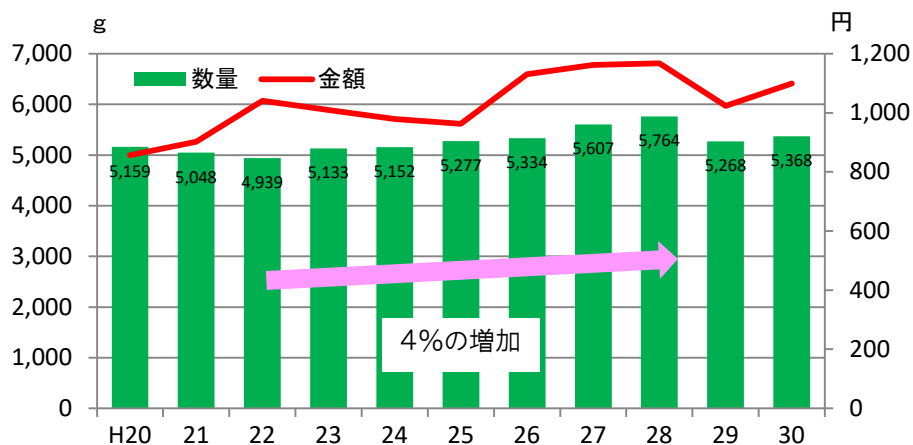


平成30年



- 平成30年の1人当たり年間購入数量は5,368グラムで、近年増加傾向。また、販売価格に関係なく購入量が増加している。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は109%（21,100ha）、出荷量は91%（94.7万トン）。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で81%、出荷量で91%を占める。全国出荷量シェアは、指定野菜の中ではれいしょと並んで高い。

○ たまねぎの年間購入数量と購入金額の推移



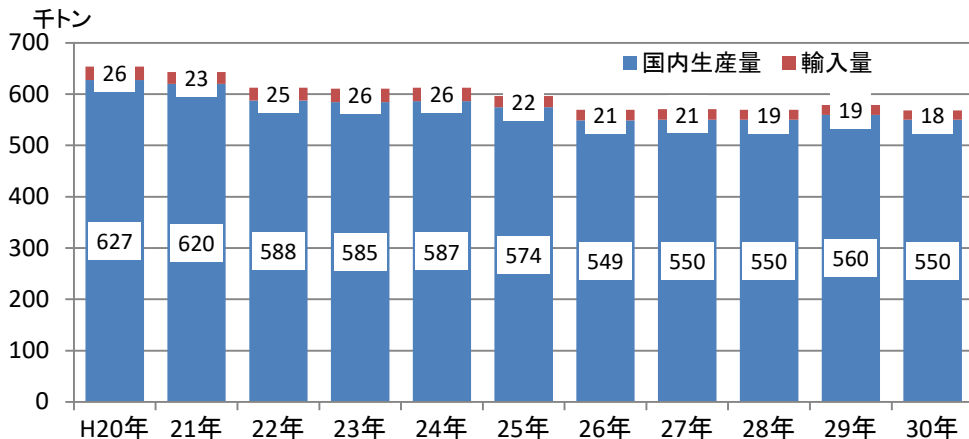
○ たまねぎにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年			
作付面積		出荷数量		作付面積		出荷数量	
全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地
24,100	(80.1%)	1,121,000	(93.0%)	26,200	(80.5%)	1,042,000	(90.9%)
24,100	19,300	1,121,000	1,042,000	26,200	21,100	1,042,000	947,100

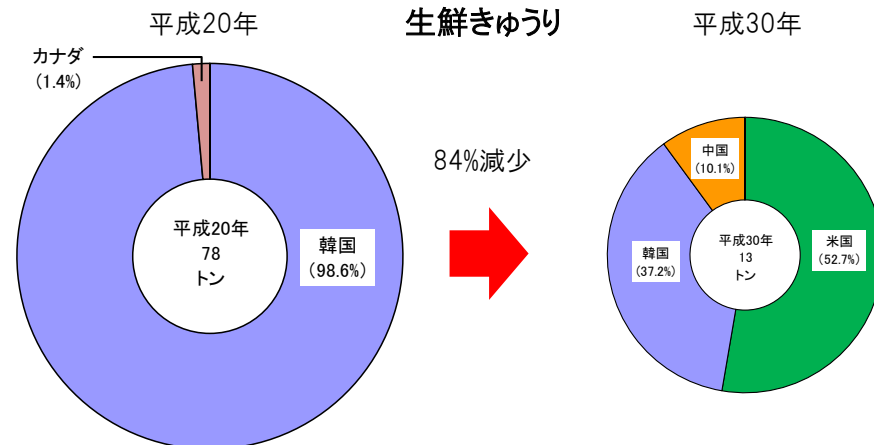
8 きゅうり

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、漸減傾向（平成20年65.4万トン→平成30年56.8万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で97%と近年国産割合が上昇（平成20年は96%）。
- 国内生産量は減少（平成30年は55万トン、平成20年比で88%）。上位5県では、宮崎県（同104%）以外は減少。生産量の多い県では高知県（同101%）も増加。
- 平成30年の輸入量は1.8万トンで、平成20年に比べて30%減少。特に生鮮きゅうりが大幅に減少し、国産が不作の際に主に漬物用として輸入。

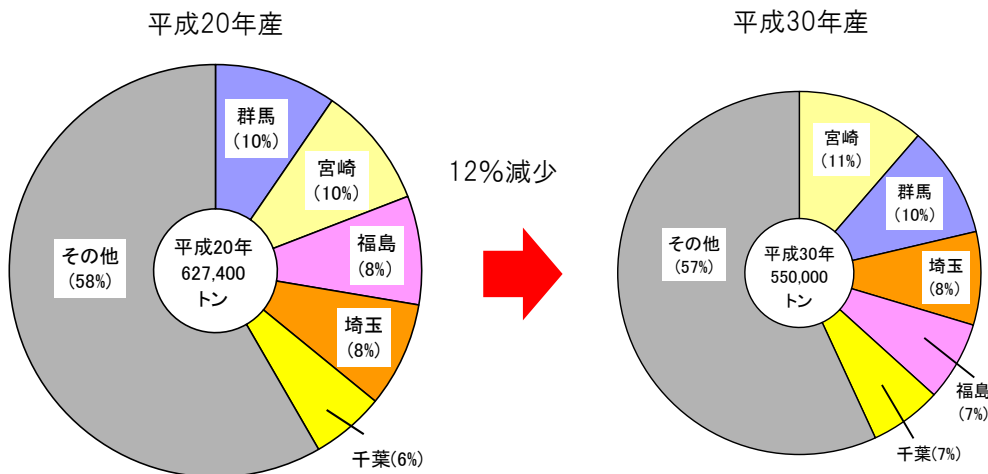
○ きゅうりの国内生産量及び輸入量の推移



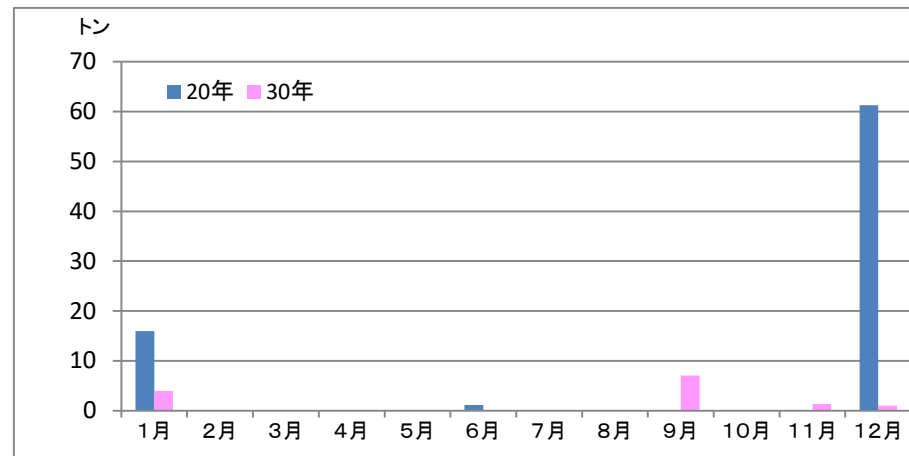
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



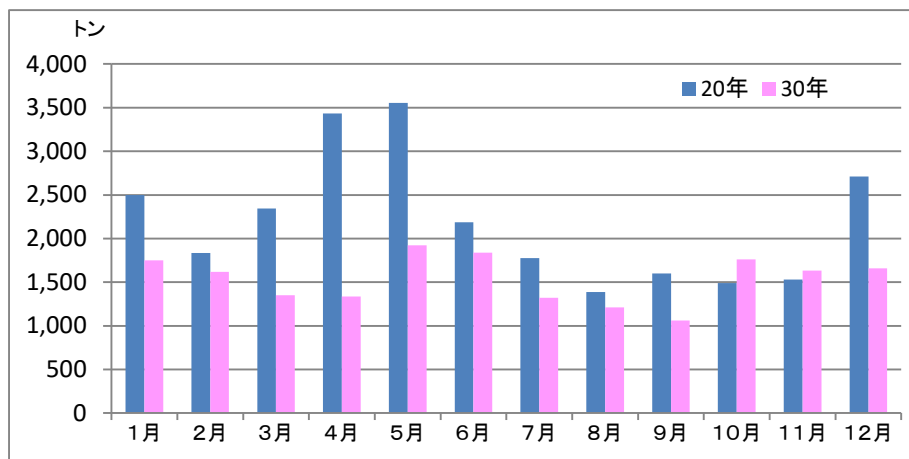
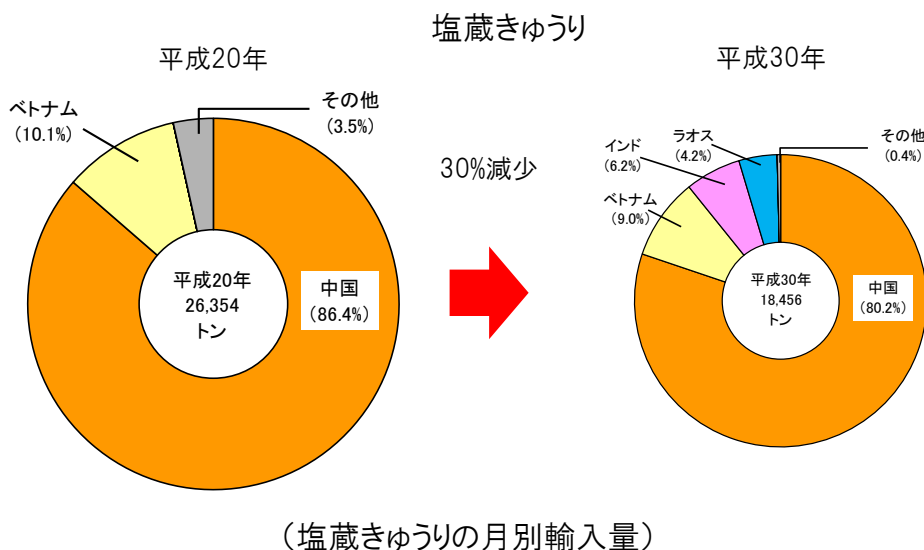
○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）



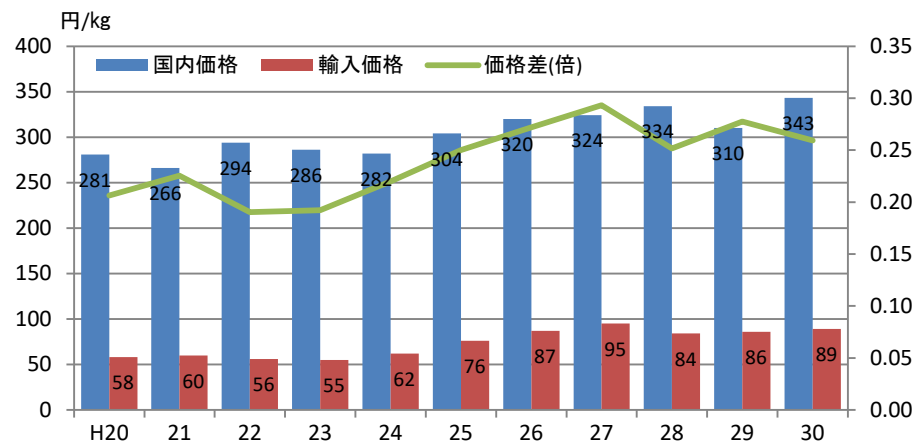
（生鮮きゅうりの月別輸入量）



- 塩蔵きゅうりは、漬物原料として主に中国から輸入されており、平成30年の輸入量は1.8万トンで平成20年に比べて30%減少。近年はインドやラオスからの輸入量が増加。
- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は89円/kgで、近年、国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の2～3割程度で推移。指定野菜の中でも内外価格差が大きい品目。



○ 国産きゅうりと輸入きゅうり（塩蔵）の価格の比較



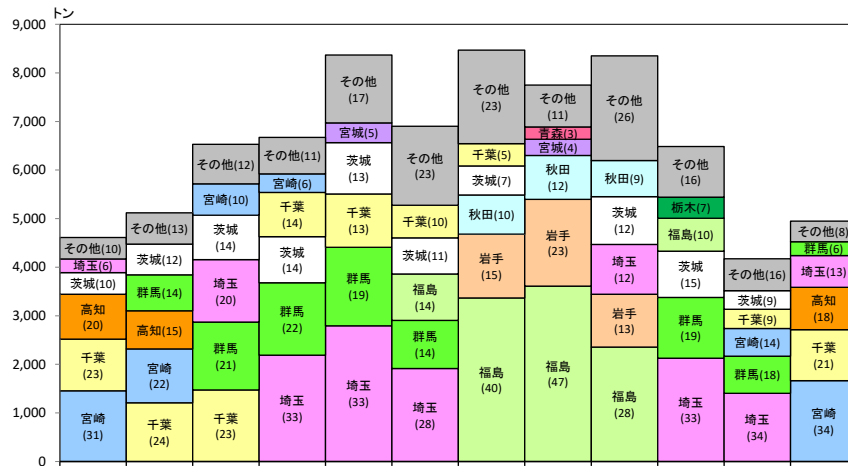
○ 国産きゅうりと輸入きゅうり（塩蔵）の出回り時期

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
産地等												
宮崎県	←											→
群馬県			←		→				←		→	
埼玉県	←											→
中国	←											→
ベトナム	←											→

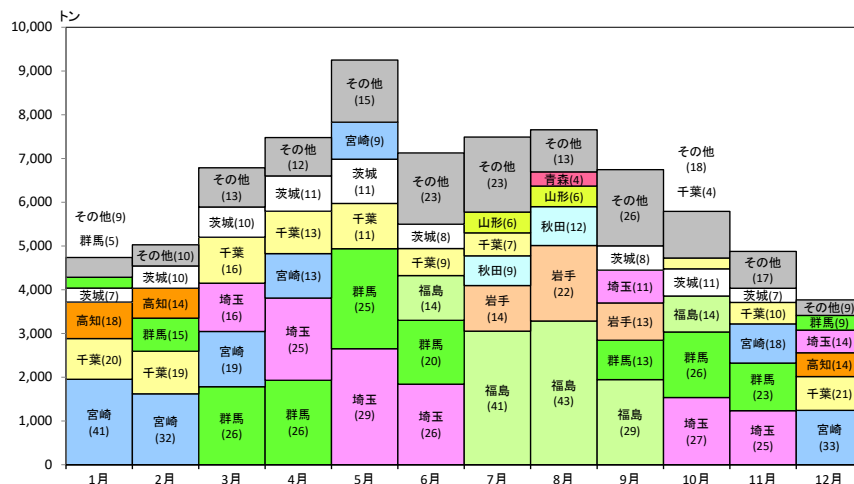
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、7.7万トンで平成20年に比べてやや減少（平成20年比98%）。上位10県では、多くの県が減少する中で、宮崎県（同142%）及び群馬県（同134%）は大きく増加。
- 平成30年の1人当たり年間購入数量は2,589グラムで、年によって増減はあるが横ばいで推移。1人当たり年間購入金額は1,142円で販売価格や気温により変動はあるがやや増加傾向にある。また、昭和50年の購入量は5,365グラムで漬物用の購入が多かったが、食生活の変化による漬物需要の低下から購入量は減少し、現在はサラダ食材用の購入も多い。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は87%（5,020ha）、出荷量は90%（31.7万トン）と減少。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で47%、出荷量で67%を占める。

○ 東京都中央卸売市場の入荷量

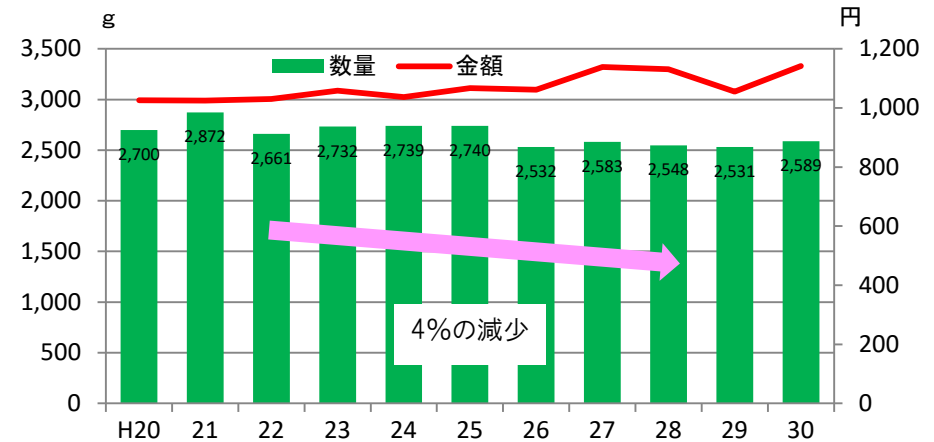
平成20年



平成30年



○ きゅうりの年間購入数量と購入金額の推移



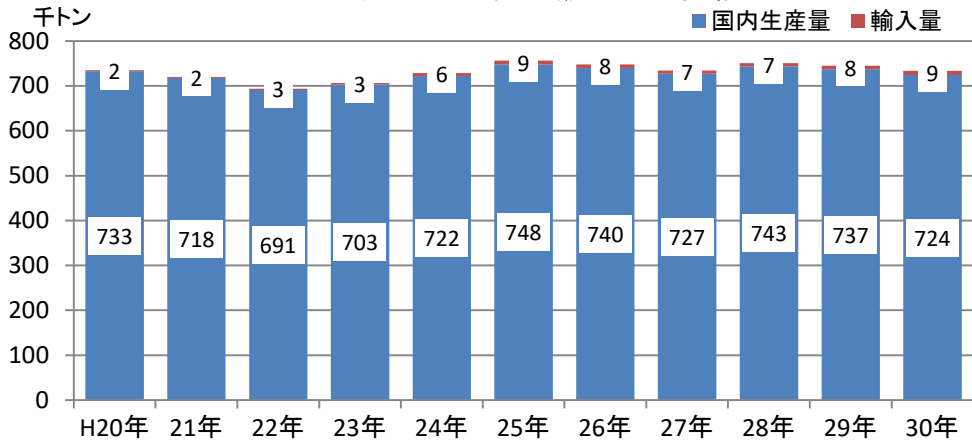
○ きゅうりにおける指定産地の位置付け

	20年				平成30年			
	作付面積		出荷数量		作付面積		出荷数量	
	全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地
夏秋	9,270	(38.7%)	225,100	(57.7%)	7,810	(40.5%)	195,600	(55.5%)
冬春	3,240	(67.9%)	302,800	(73.4%)	2,760	(67.4%)	280,500	(74.3%)
合計	12,500	(46.3%)	527,900	(66.7%)	10,600	(47.4%)	476,100	(66.6%)

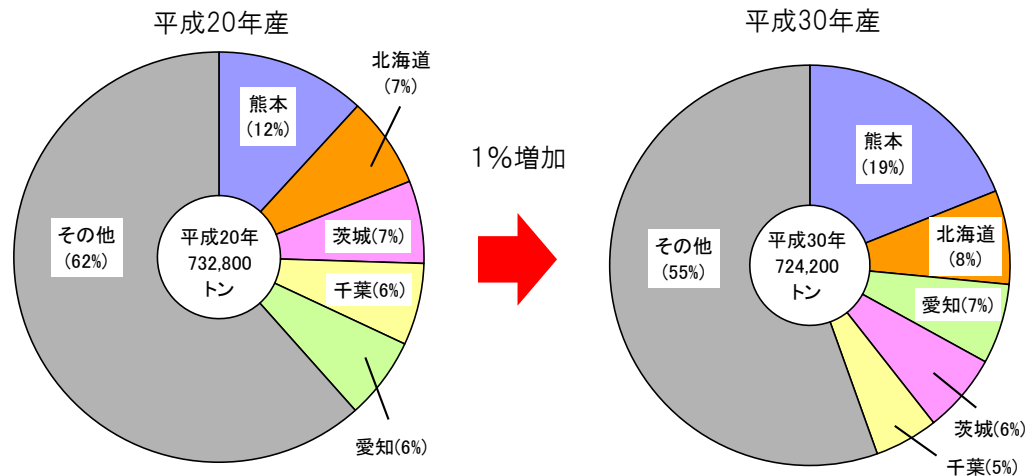
9 トマト

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、年によって増減はあるものの、近年横ばい傾向（平成20年73.5万トン→平成30年73.4万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で98.7%と横ばいで推移（平成20年は99.6%）。
- 国内生産量が横ばいで推移する中で（平成30年は72.4万千トン、平成20年比で99%）、大玉からミニに生産が移行し、ミニトマトの生産量は拡大（平成20年比で138%）。上位5県では、熊本県（同158%）及び北海道（同105%）が増加。
- 輸入量は、年により増減するが平成30年は9千トンで平成20年の4.6倍。米国産の割合が減少する一方、韓国産、メキシコ産及びニュージーランド産が増加。

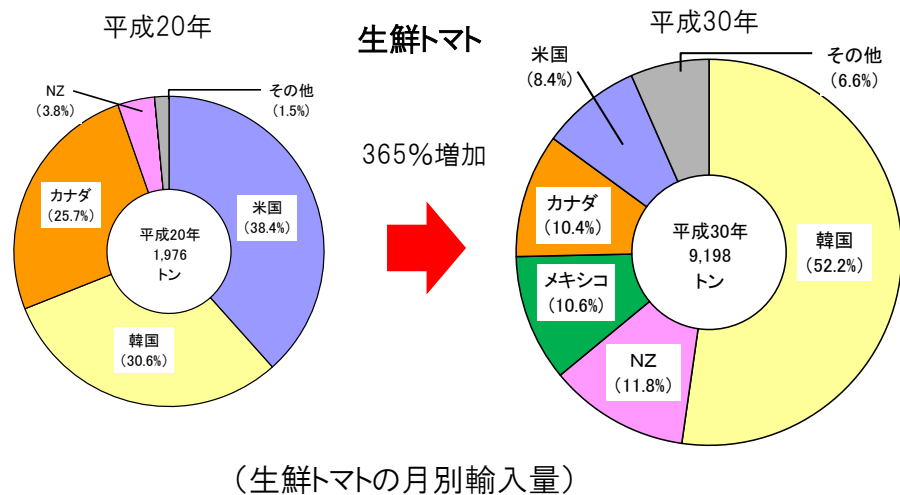
○ トマトの国内生産量及び輸入量の推移



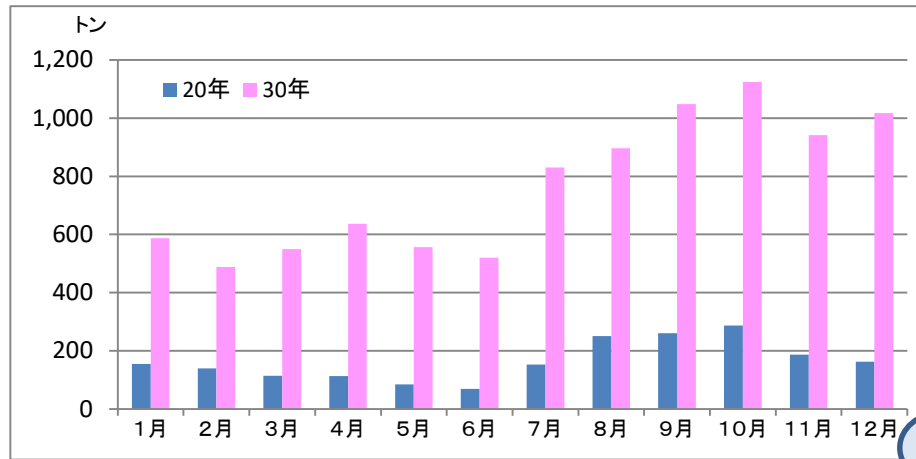
○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）



○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）

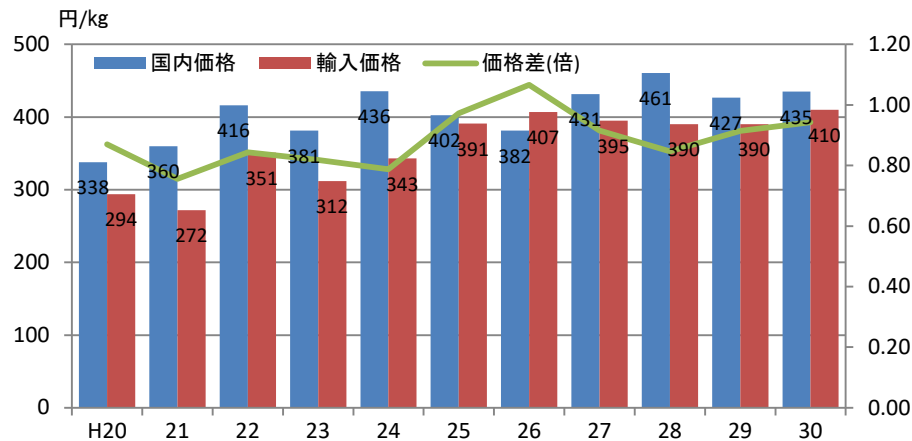


（生鮮トマトの月別輸入量）

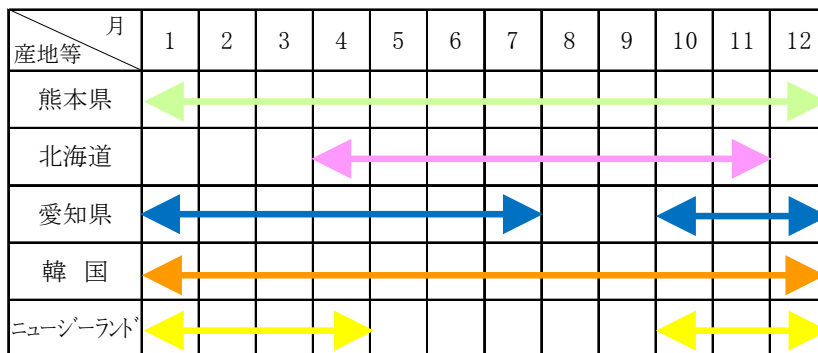


- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は410円/kgで、近年国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）と同程度。内外価格差が少ない中で輸入量が増加しているのは、国内輸送コストなどにより輸入品に優位性があるためと考えられる。
- 輸入品は周年で出回っている。卸売市場への入荷は少なく、多くは加工・業務用に仕向けられている。
- 平成30年の市場入荷量は、10.6万トンと平成20年比べて入荷量が多くなった品目の一つ（平成20年比109%）。県別では、熊本県（同171%）、北海道（同168%）、栃木県（同136%）及び静岡県（同115%）が大幅に増加。

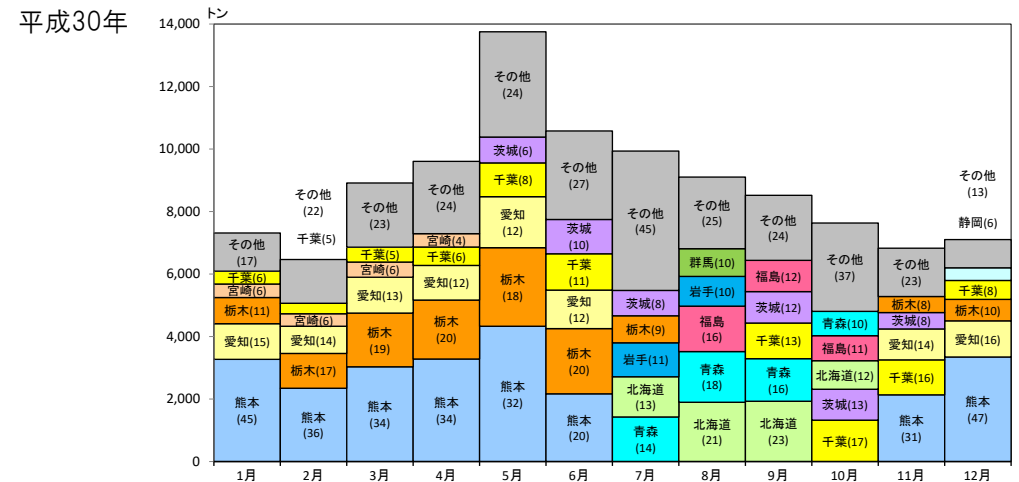
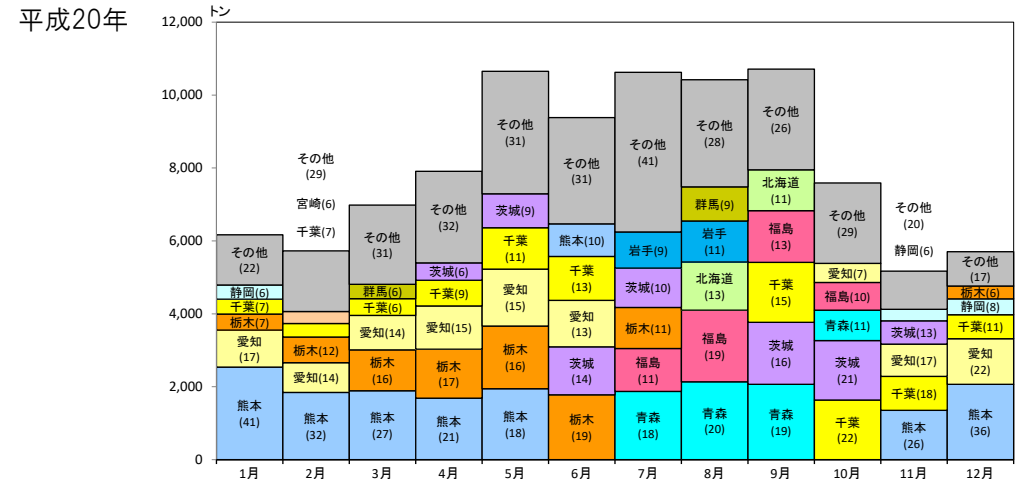
○ 国産トマトと輸入トマト（生鮮）の価格の比較



○ 国産トマトと輸入トマト（生鮮）の出回り時期

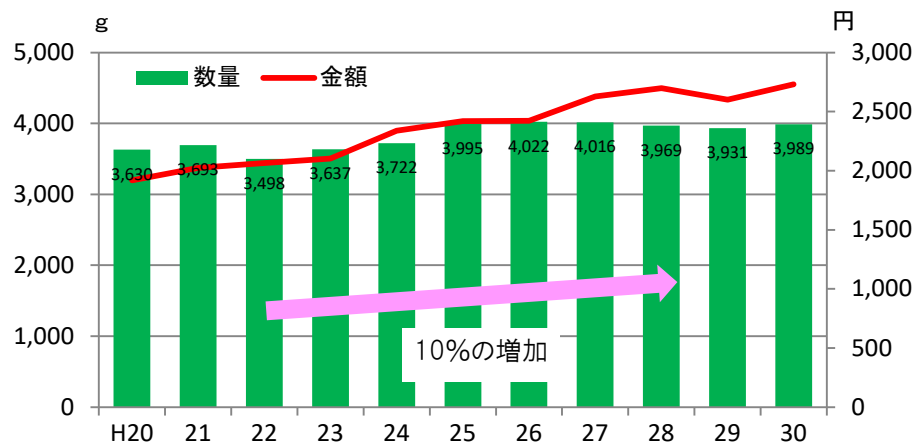


○ 東京都中央卸売市場の入荷量



- 平成30年の1人当たり年間購入数量は3,989グラムで、増加傾向。近年は4,000グラム前後で推移。また、価格に関係なく購入数量の増減は少ない。家庭内でサラダ等で一定量が消費されているためと考えられる。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は93%（6,030ha）、出荷量は102%（43.1万トン）。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で51%、出荷量で66%を占める。

○ トマトの年間購入数量と購入金額の推移



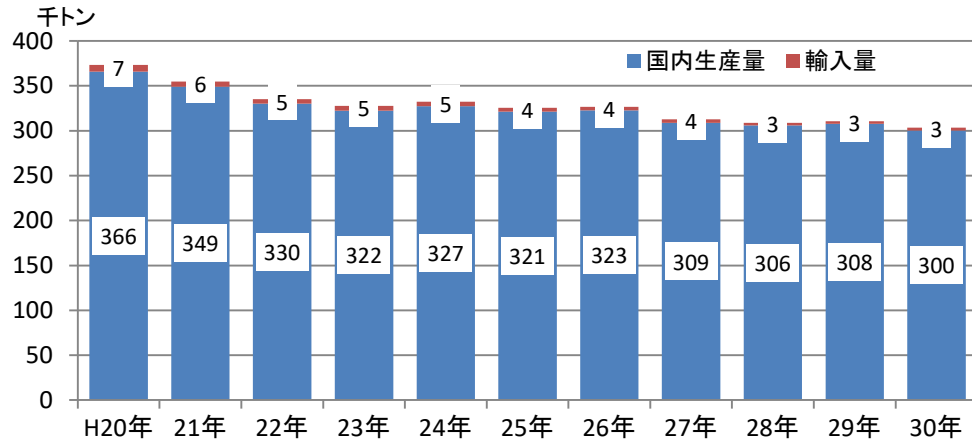
○ トマトにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年				(単位:ha, t)	
	作付面積		出荷数量			作付面積		出荷数量	
	全国	指定産地	全国	指定産地		全国	指定産地	全国	指定産地
夏秋	8,470	(47.5%) 4,020	293,300	(66.6%) 195,300	夏秋	7,810	(46.6%) 3,640	268,300	(63.5%) 170,300
冬春	4,060	(61.1%) 2,480	355,000	(64.3%) 228,400	冬春	3,970	(60.2%) 2,390	388,800	(67.1%) 260,800
合計	12,500	(52.0%) 6,500	648,300	(65.4%) 423,700	合計	11,800	(51.1%) 6,030	657,100	(65.6%) 431,100

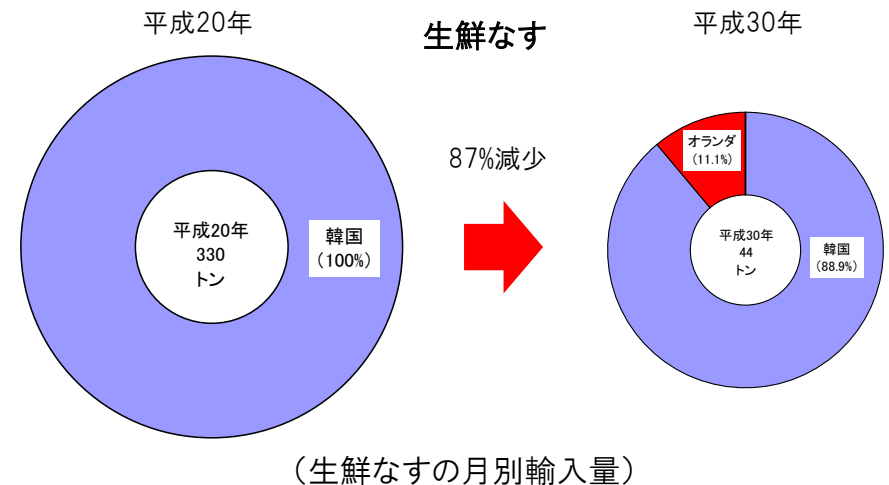
10 なす

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、この10年間で約2割減少（平成20年37.3万トン→平成30年30.0万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で99%と国産の割合が微増（平成20年は98%）。
- 国内生産量は減少（平成30年は30万トン、平成20年比82%）。上位5県では、群馬県（同111%）及び高知県（同102%）のほか、福井県、宮崎県、秋田県が増加。
- 生産量が多いのは高知県、熊本県、福岡県など西南暖地の冬春なすの主産地であり、周年で出荷している。群馬県は露地の産地のために夏場が中心。

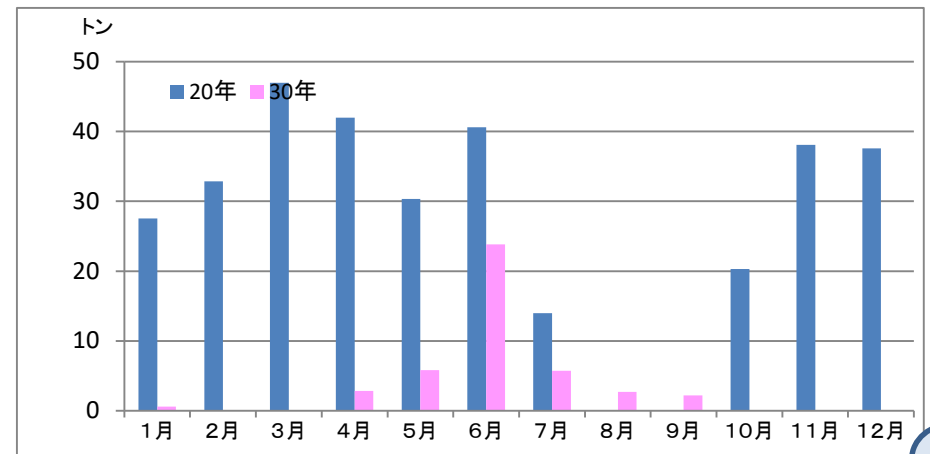
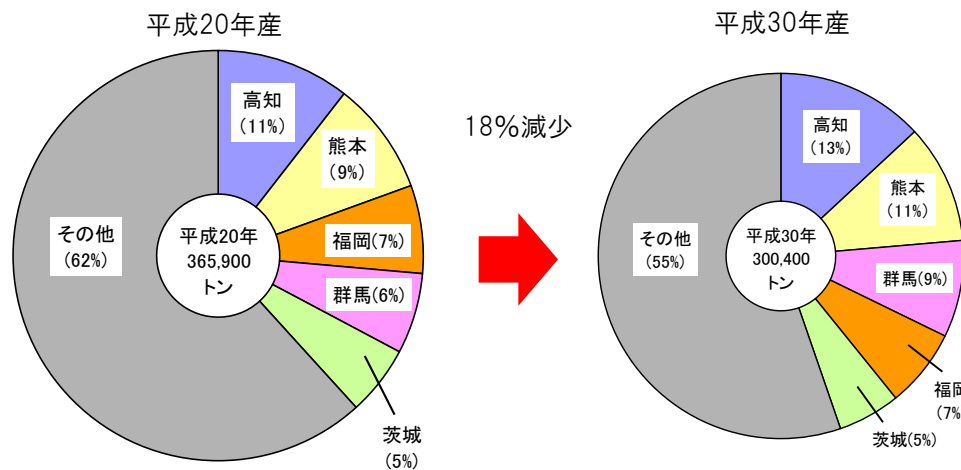
○ なすの国内生産量及び輸入量の推移



○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）

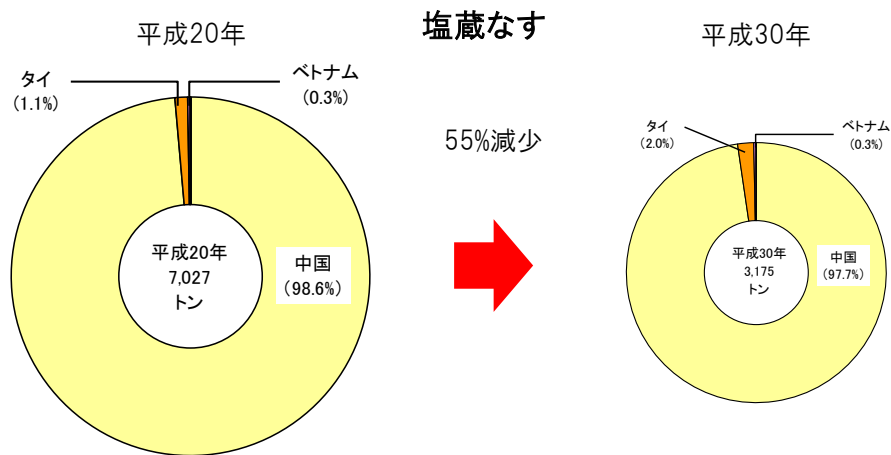


○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）

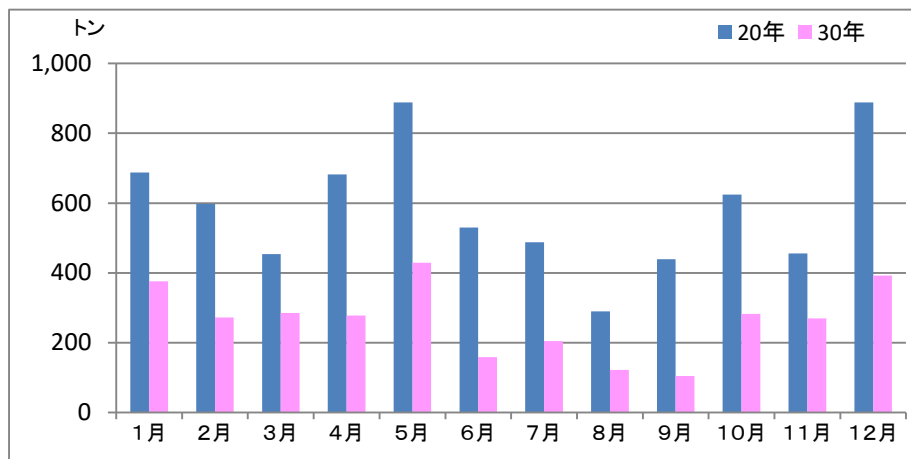


- 平成30年の生鮮なすの輸入量は44トンで平成20年に比べ87%減少。近年は、国産の作型が変わる6～7月に主に漬物用原料として韓国から輸入。
- 平成30年の塩蔵なす（なす＋こなす）の輸入量は3,175トンで、漬物原料用として主に中国から輸入されており、平成20年に比べ55%減少。タイからの輸入量は減っていない。
- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は288円/kgで、近年国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の6割～7割程度。

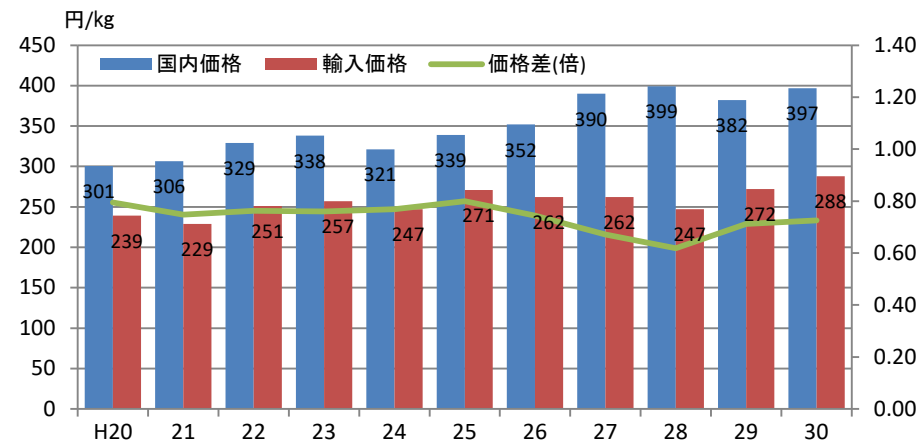
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



（塩蔵なすの月別輸入量）



○ 国産なすと輸入なす（生鮮）の価格の比較



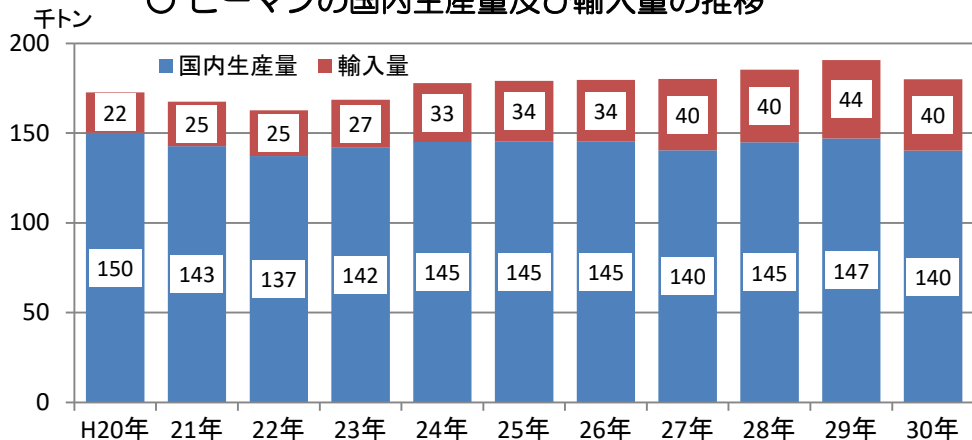
○ 国産なすと輸入なす（生鮮）の出回り時期

産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
高知県	←→											
熊本県	←→											
群馬県							←→	←→				
福岡県	←→											
韓国					←→	←→						

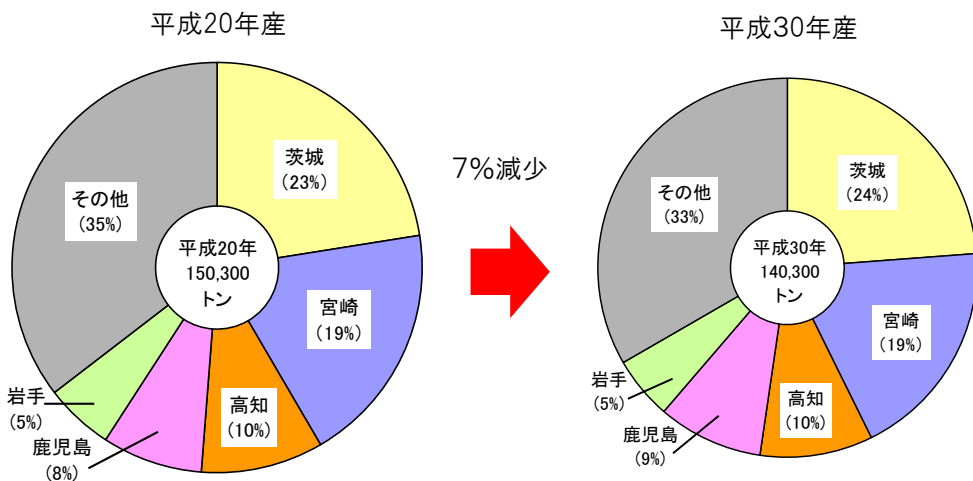
11 ピーマン

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、近年横ばい傾向（平成20年17.3万トン→平成30年18.0万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で78%（平成20年は87%）であり、他の品目に比べて国産割合が低い。需要が増加しているジャンボピーマン（パプリカ）の輸入が増加していることが一因。
- 国内生産量は減少傾向（平成30年は14万トン、平成20年比で93%）。上位5県では、鹿児島県（同120%）、茨城県（同104%）及び岩手県（同102%）が増加。
- 平成30年の輸入量は4万トンでこの10年間で77%増加。ジャンボピーマンが周年で主に韓国、オランダから輸入されているが、国内生産量は年々増加しているものの、需要に比べて少ないことが要因と考えられる。

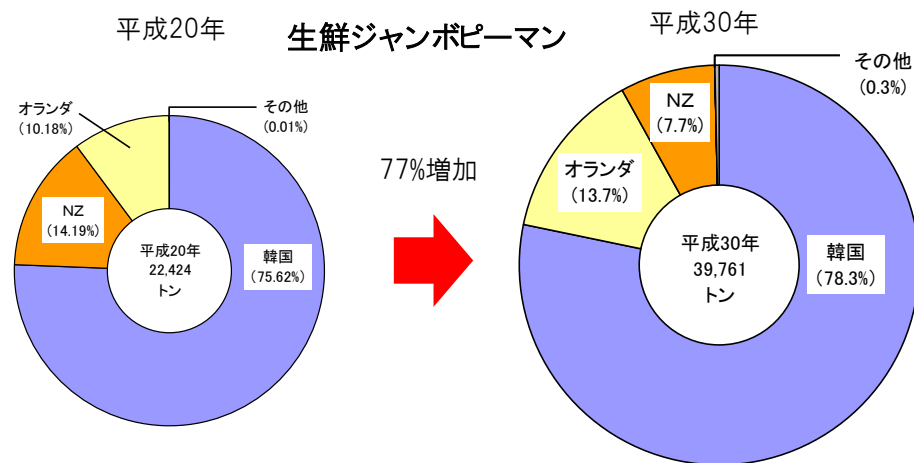
○ ピーマンの国内生産量及び輸入量の推移



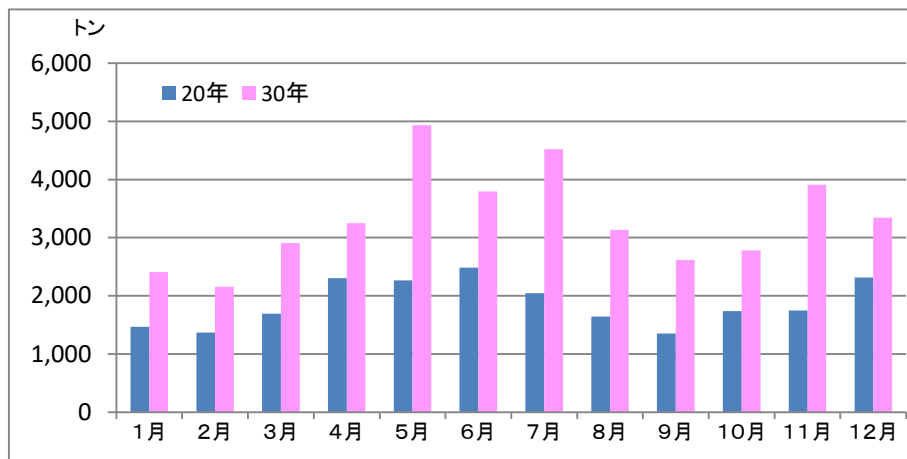
○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）



○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）

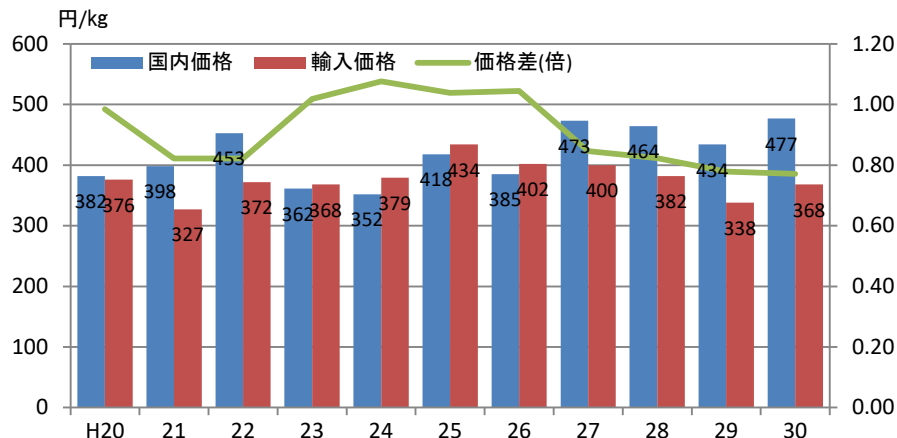


（生鮮ピーマンの月別輸入量）

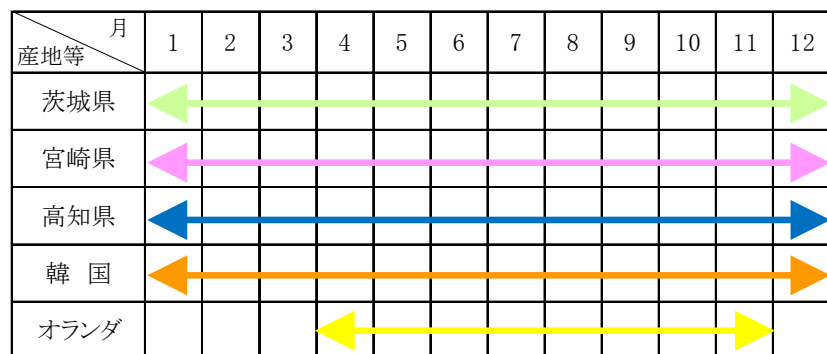


- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は368円/kgで、近年国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の8割程度。
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、2.4万トンで平成20年と同水準（平成20年比99%）。上位10県では、宮崎県（同139%）、鹿児島県（同123%）及び高知県（118%）が増加。
- パプリカ等の主な国内産地は、茨城県、宮城県、高知県等で、生産量は増加傾向。

○ 国産ピーマンと輸入ピーマン（生鮮）の価格の比較

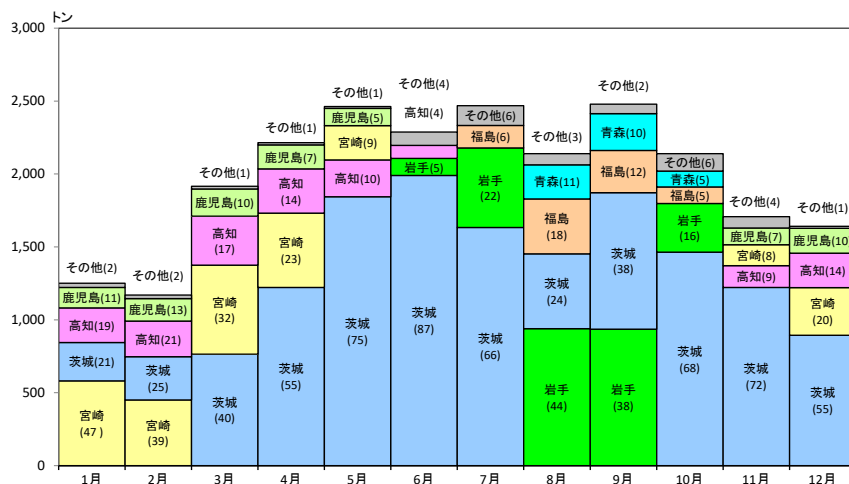


○ 国産ピーマンと輸入ピーマン（生鮮）の出回り時期

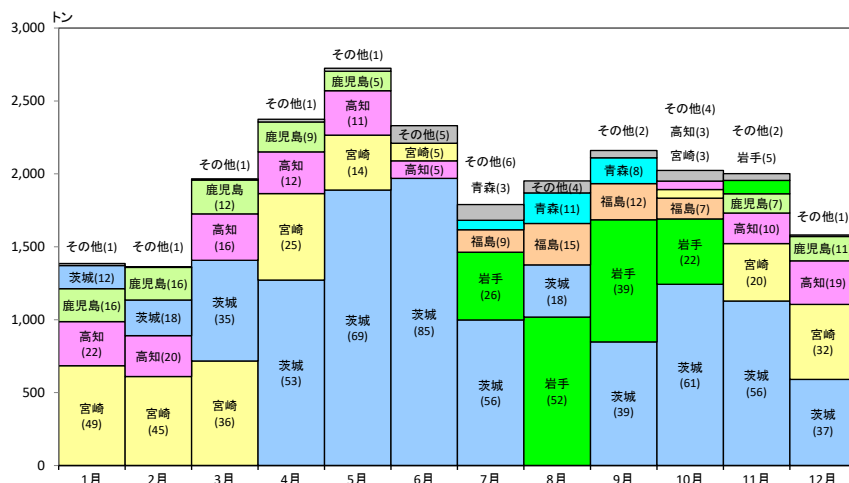


○ 東京都中央卸売市場の入荷量

平成20年

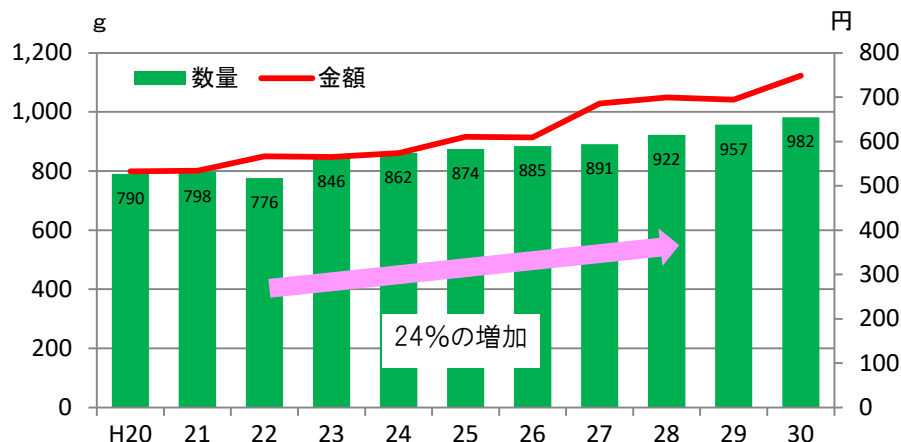


平成30年



- 1人当たり年間購入数量は、増加傾向で推移しており、平成30年は982グラム。家庭でのサラダの材料としてパプリカ等の購入が増えていることも一因。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は99%（1,329ha）、出荷量は101%（91千トン）。冬春ピーマンは、9割以上が指定産地から出荷されている。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で46%、出荷量で76%を占める。果菜類の中では割合が1番高い。

○ ピーマンの年間購入数量と購入金額の推移



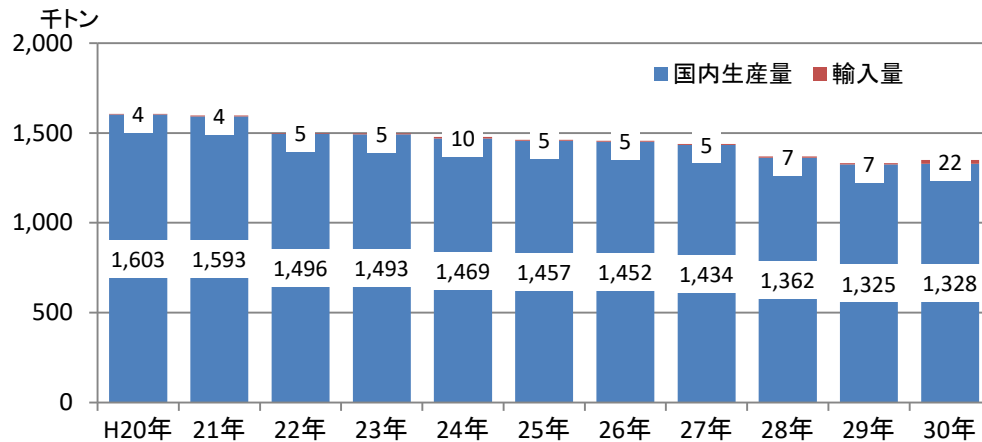
○ ピーマンにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年				(単位:ha、t)	
	作付面積		出荷数量			作付面積		出荷数量	
	全国	指定産地	全国	指定野菜		全国	指定産地	全国	指定野菜
夏秋	2,363	(28.6%) 675	52,100	(46.6%) 24,300	夏秋	2,188	(32.3%) 706	48,890	(54.2%) 26,500
冬春	710	(93.7%) 665	69,080	(94.2%) 65,100	冬春	698	(89.3%) 623	69,620	(91.9%) 64,000
合計	3,074	(43.6%) 1,340	121,090	(73.8%) 89,400	合計	2,885	(46.1%) 1,329	118,510	(76.4%) 90,500

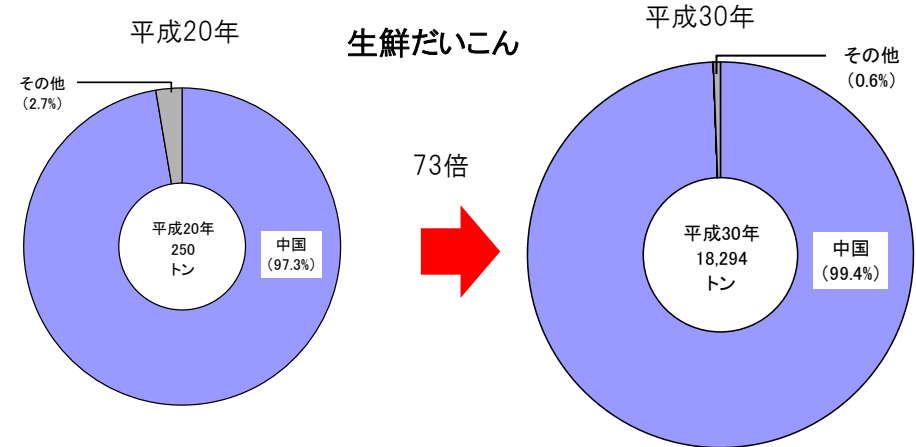
12 だいこん

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、この10年間で16%減少（平成20年161万トン→平成30年135万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年は輸入量が多かったことから98.4%に減少（平成20年は99.7%）。
- 国内生産量は減少（平成30年は133万トン、平成20年比で83%）。上位5県では、すべての道県で減少。
- 輸入量は、平成19年から27年までは平成24年を除いて4～5千トンで推移していたが、近年は増加傾向。多くは漬物用原料用であり、国産の作況で輸入量の変動。平成30年は国産が台風、秋以降の低温で少なくなったことから2.2万トンに急増。

○ だいこんの国内生産量及び輸入量の推移

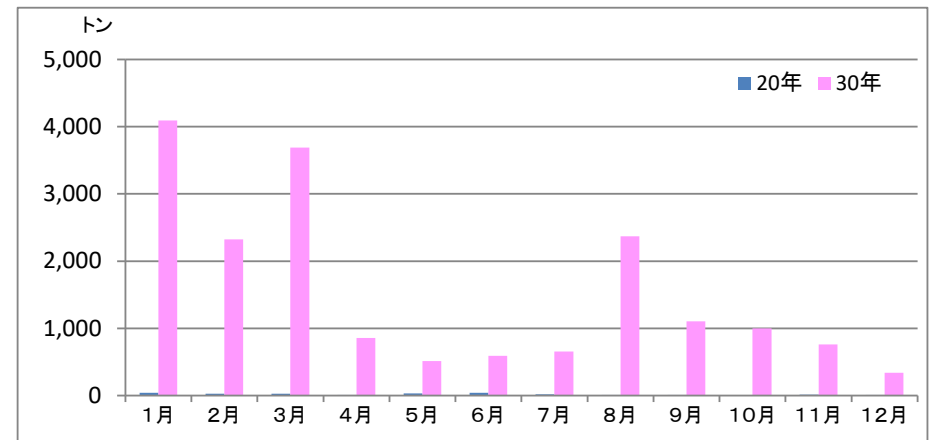
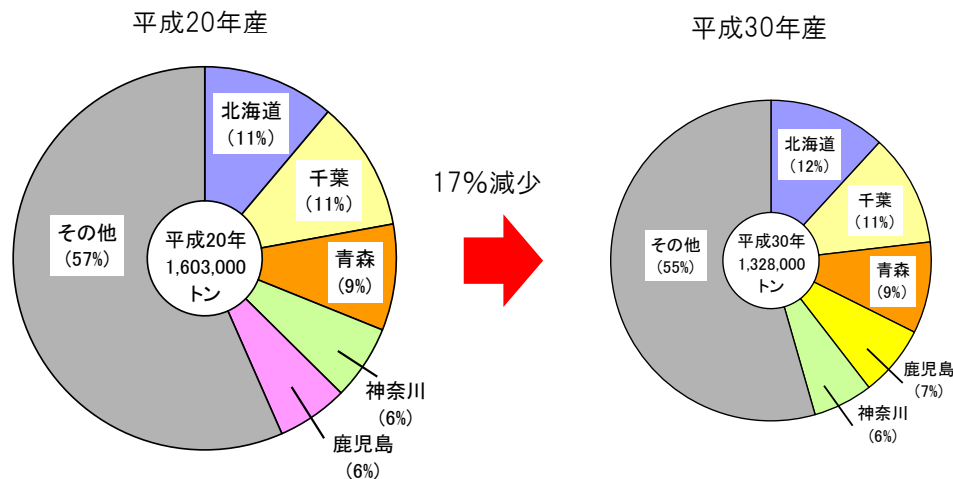


○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



（生鮮だいこんの月別輸入量）

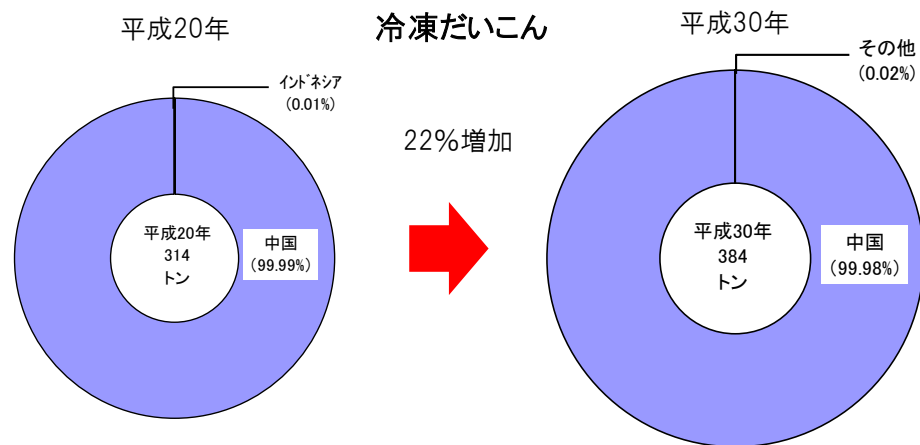
○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）



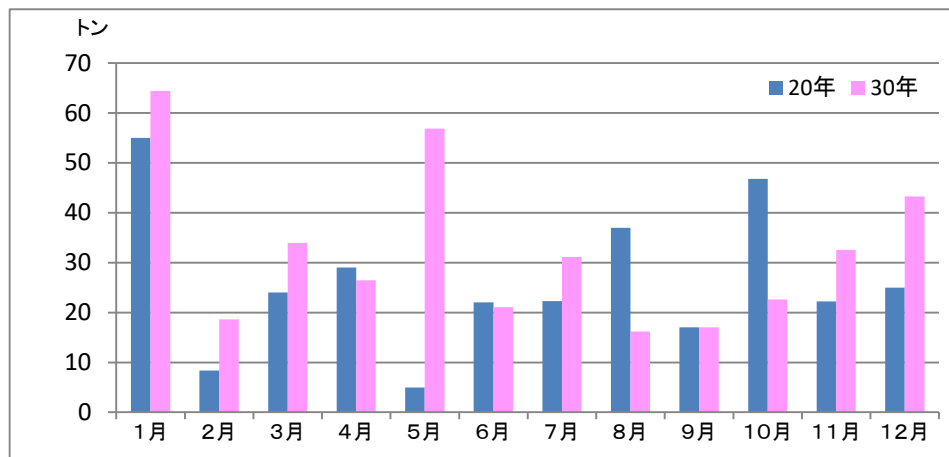
（生鮮だいこんは、貿易統計でその他根菜に区分され、データがない。植物防疫の国別検査数量が把握できる18年以降を輸入数量として代用した。）

- 冷凍だいは、中国から主に業務用のだいはおろし用として周年で輸入。平成30年の輸入量は384トンで、平成20年に比べて122%増加。乾燥だいは、主に中国から切り干しだいの原料として、周年で毎年3～4千トン輸入。
- 国産だいの東京都中央卸売市場の卸売価格は、49円/kgから194円/kgの間で変動して平成30年は106円/kg。1～3月は千葉産が台風、生育期の低温、6～9月は北海道産、青森産が4～5月の低温、6～7月の豪雨や長雨、その後の高温で病気が発生した等により入荷量が少なくなり、平年を上回る価格となった。

○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）

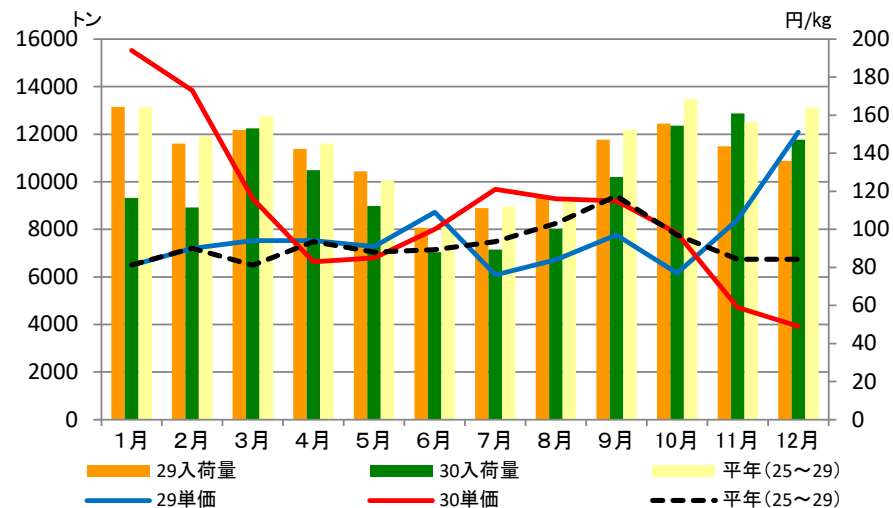
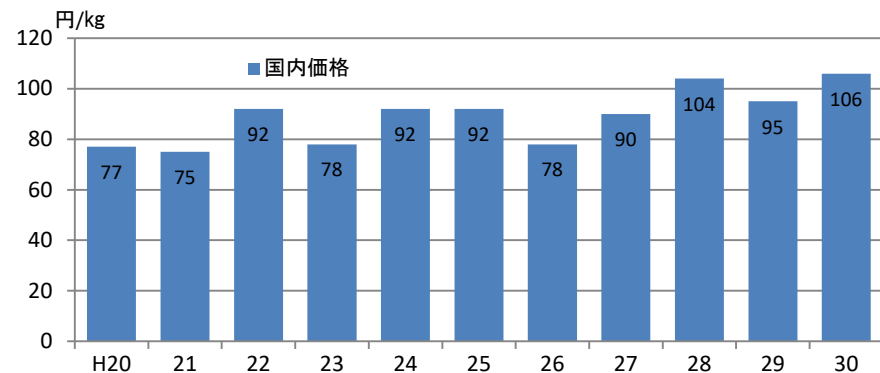


（冷凍だいの月別輸入量）



（冷凍だいは、貿易統計でその他の冷凍野菜に区分され、データがない。植物防疫の検査数量が把握できる18年以降を輸入数量として代用した。）

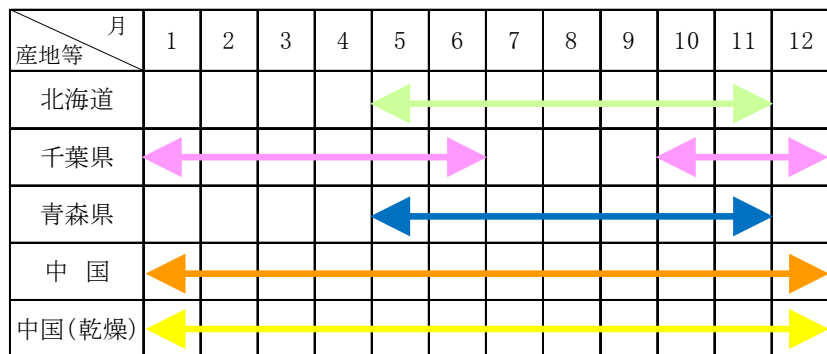
○ 国産だいの卸売価格の推移（年別・月別）



（生鮮だいは、冷凍だいは貿易統計上その他に分類されているため、ここでは植物防疫の検査数量を輸入数量として代用した。そのため輸入価格については不明である。）

- 1人当たり年間購入数量は、平成26年以降減少傾向にあり平成30年は4,000グラム弱。家庭で漬物を作らなくなり、はくさいなどと並んで消費量の減少が大きく、価格が上がると購入量が少なくなる傾向がある。
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、11.9万トンで平成20年比べて減少（平成20年比87%）。上位10県では、岩手産及び徳島産が大きく減少する一方、10年前は東京市場にほとんど出荷がなかった鹿児島県（同16321%）、茨城県（同133%）及び青森県（同109%）は増加。

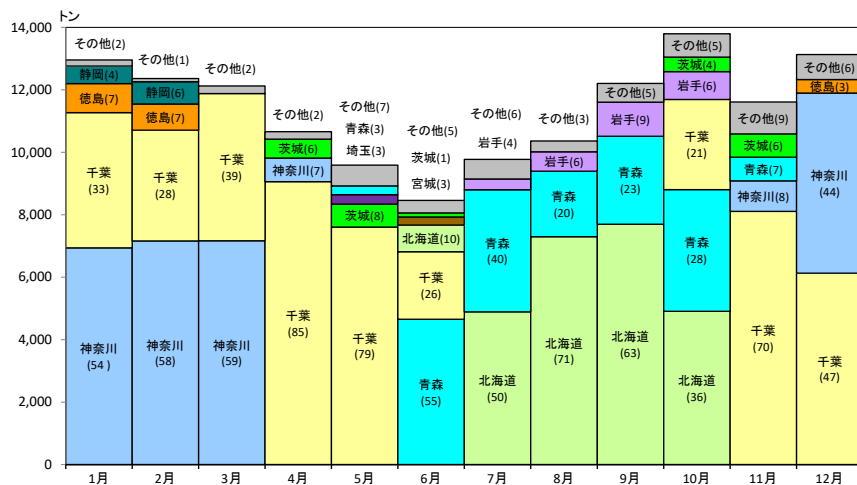
○ 国産だいこんと輸入だいこん（生鮮）の出回り時期



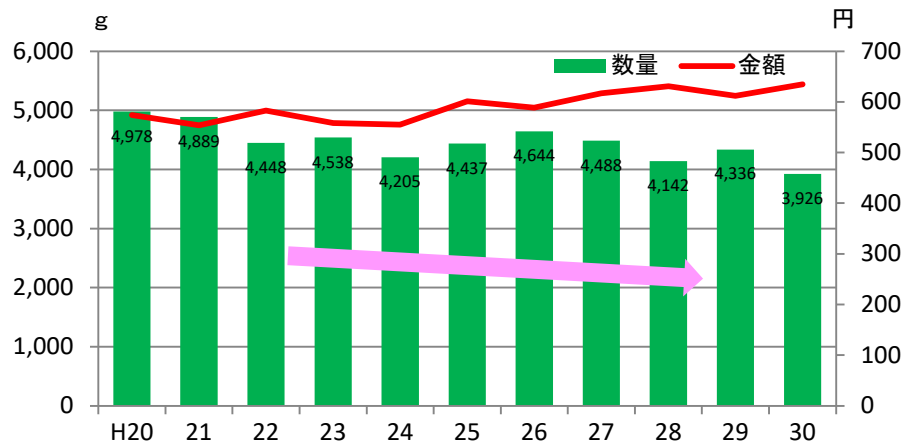
平成20年

21%の減少

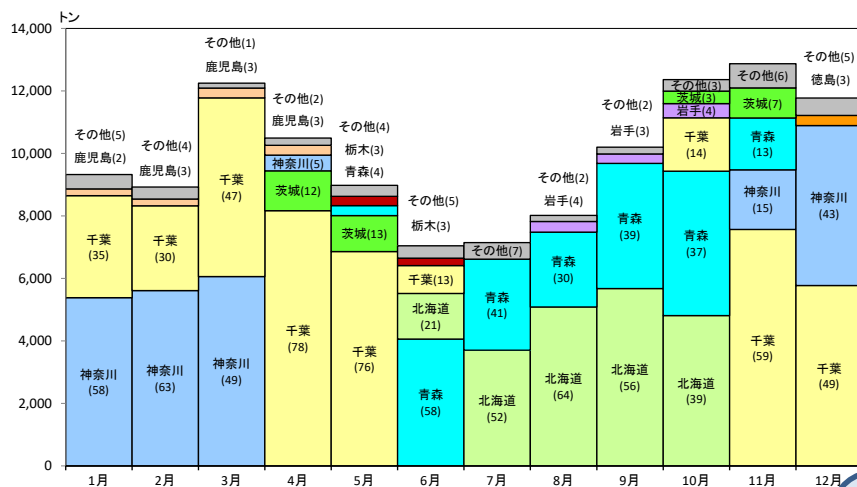
○ 東京都中央卸売市場の入荷量



○ だいこんの年間購入数量と購入金額の推移



平成30年



- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は83%（9,200ha）、出荷量は86%（46.2万トン）と大きく減少。夏だいこんは、他の作型と比較すると、指定産地からの出荷が3分の2以上を占めている。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で29%、出荷量で42%を占める。

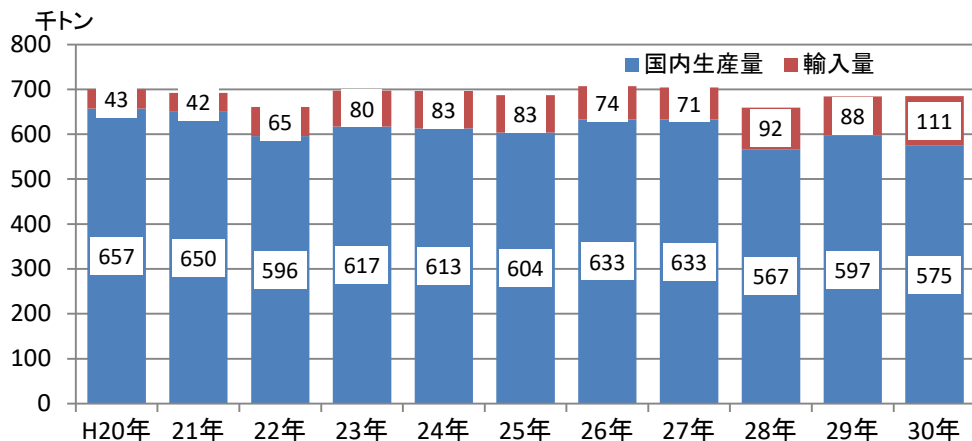
○ だいこんにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年				(単位:ha、t)	
	作付面積		出荷数量			作付面積		出荷数量	
	全国	指定産地	全国	指定産地		全国	指定産地	全国	指定産地
春	5,010	(27.9%) 1,400	222,100	(36.1%) 80,200	春	4,450	(28.5%) 1,270	191,700	(37.6%) 72,100
夏	7,150	(63.2%) 4,520	230,000	(75.0%) 172,500	夏	5,990	(60.3%) 3,610	218,900	(67.9%) 148,600
秋冬	24,500	(21.1%) 5,180	797,700	(35.5%) 283,100	秋冬	21,000	(20.6%) 4,320	678,300	(35.5%) 241,000
合計	36,600	(30.3%) 11,100	1,250,000	(42.9%) 535,800	合計	31,400	(29.3%) 9,200	1,089,000	(42.4%) 461,700

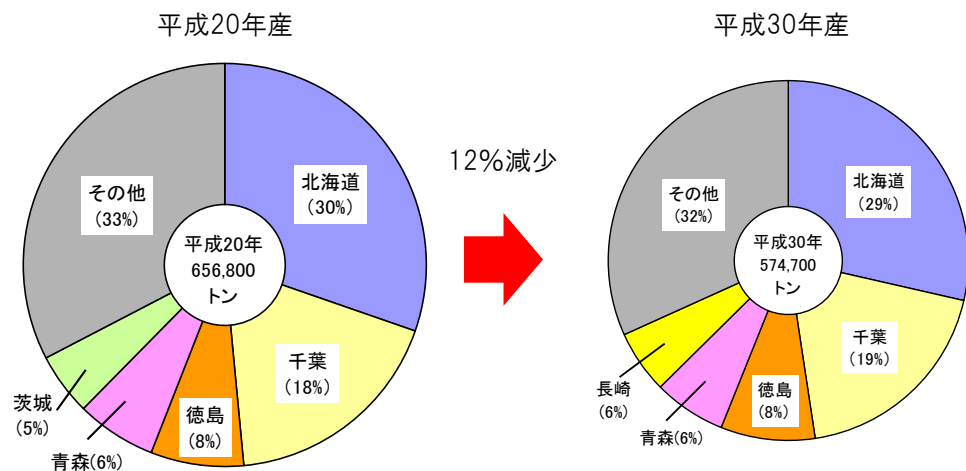
13 にんじん

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、近年横ばい傾向（平成20年70.0万トン→平成30年68.5万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で84%と国産の割合が高いが（平成20年は94%）、平成23年以降は、毎年8～10万トン程度が加工・業務用として主に中国から輸入されている。
- 国内生産量は減少（平成30年は57.5万トン、平成20年比で88%）。上位5県では、長崎県（同103%）以外は減少。全国でも大半の道府県で減少している。
- 平成30年の輸入量は11.1万トンで平成20年の2.5倍。平成20年に1月の中国産ギョーザ事案の発生により輸入量が大幅に減少したが、平成22年以降は増加。

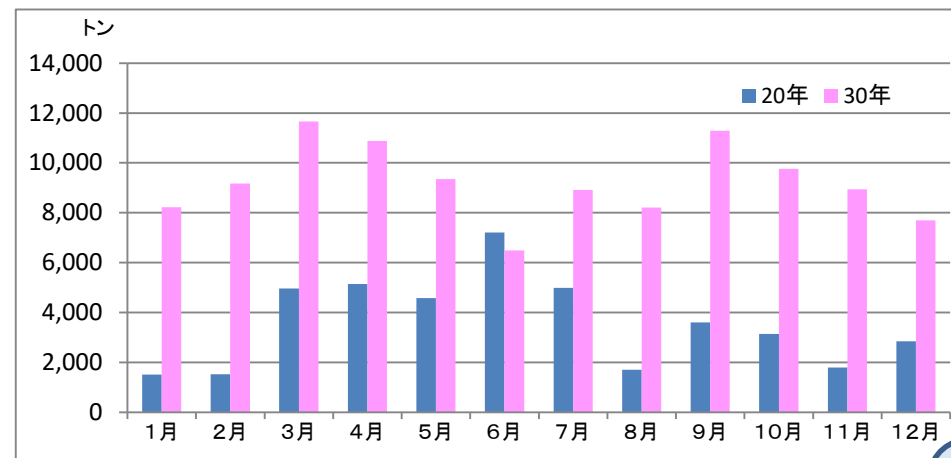
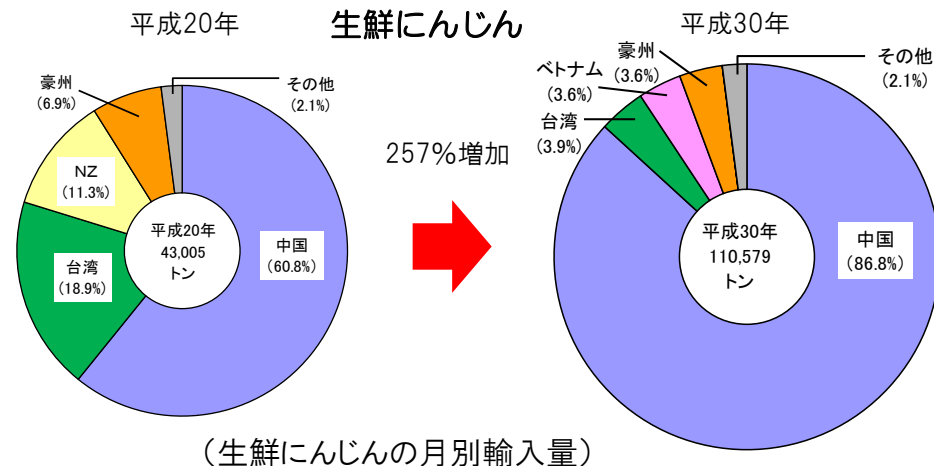
○ にんじんの国内生産量及び輸入量の推移



○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）

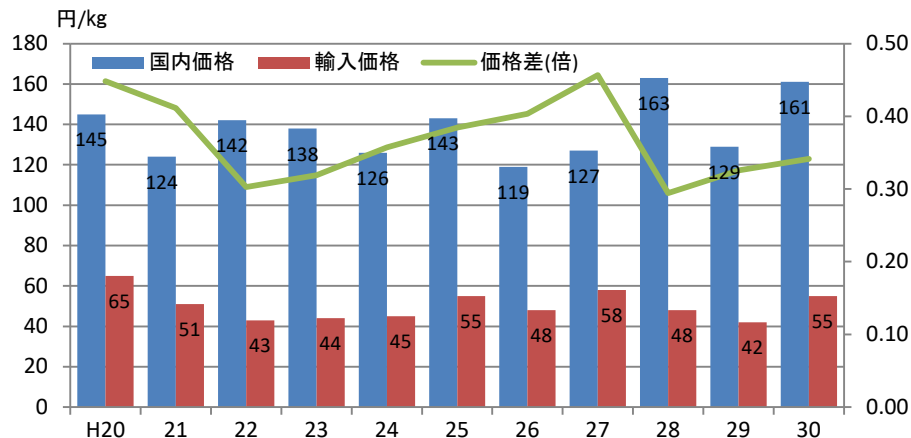


○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）

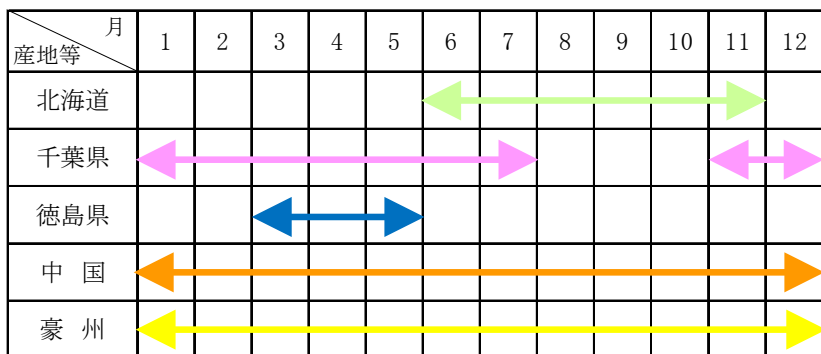


- 平成30年の輸入価格（CIF価格）は55円/kgで、平成25年以降は国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の3割程度。
- 中国産は、太物中心に周年で主に加工・業務用として仕向けられている。
- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、8.4万トンで平成20年に比べてやや減少（平成20年比96%）。上位10県では、徳島県（同110%）及び青森県（同102%）が増加。千葉産が前年10月の日照不足や長雨、北海道産が6月の日照不足、7月の台風、高温・干ばつ等で肥大不足のために減少したことから、中国産（同283%）の入荷量が大きく増加した。

○ 国産にんじんと輸入にんじん（生鮮）の価格の比較

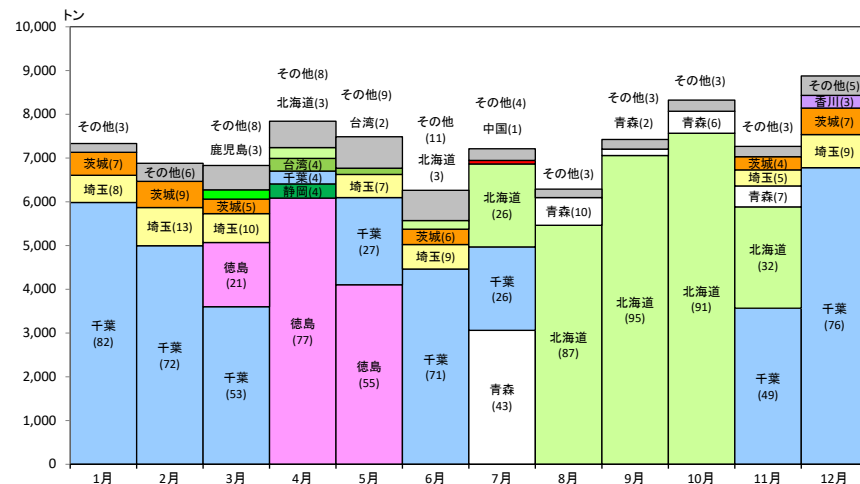


○ 国産にんじんと輸入にんじん（生鮮）の出回り時期

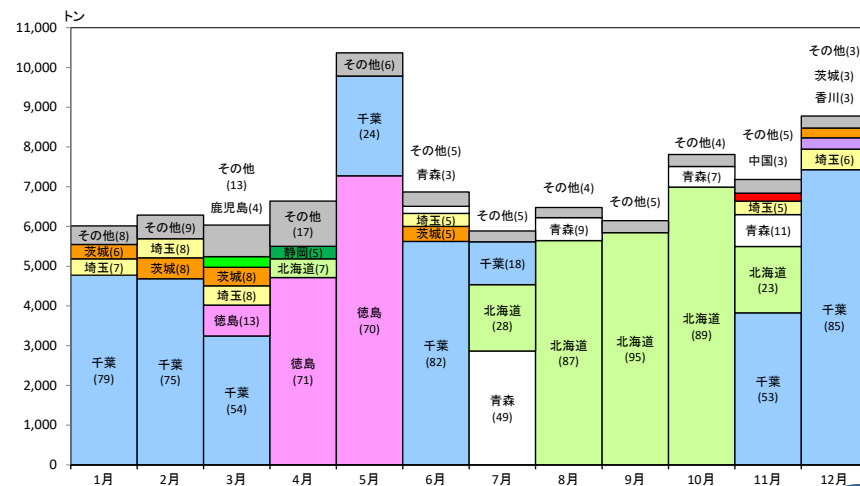


○ 東京都中央卸売市場の入荷量

平成20年

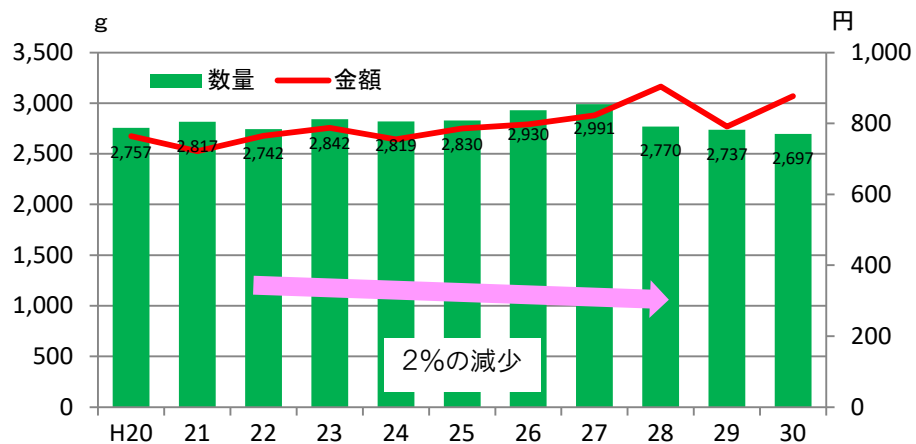


平成30年



- 1人当たり年間購入数量は、平成27年をピークに減少し、平成30年は2,697グラムに減少。価格が高い時は購入量が若干減少するが、にんじんは色々な調理方法があり、家庭において欠くことのできない野菜のため購入量の変動は比較的少ない。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は67%（11,490ha）、出荷量は93%（40.1万トン）と減少。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で67%、出荷量で78%を占める。

○ にんじんの年間購入数量と購入金額の推移



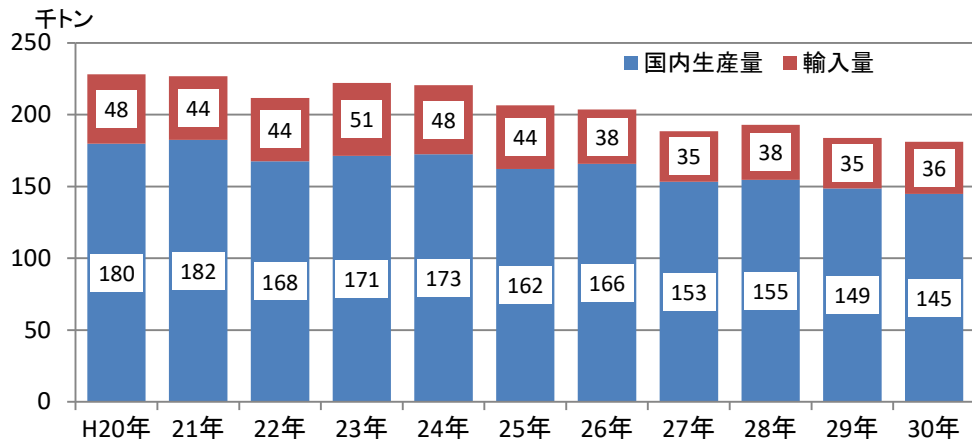
○ にんじんにおける指定産地の位置付け

平成20年				平成30年				(単位:ha, t)	
	作付面積		出荷数量			作付面積		出荷数量	
	全国	指定産地	全国	指定産地		全国	指定産地	全国	指定産地
春夏	4,320	(66.2%) 2,860	142,700	(75.5%) 107,700	春夏	4,190	(67.8%) 2,840	142,900	(76.1%) 108,800
秋	6,590	(74.2%) 4,890	196,800	(81.9%) 161,200	秋	5,410	(77.8%) 4,210	161,400	(86.4%) 139,400
冬	8,360	(57.1%) 4,770	237,700	(68.1%) 161,900	冬	7,630	(58.2%) 4,440	208,200	(73.2%) 152,300
合計	19,300	(64.9%) 12,520	577,100	(74.6%) 430,800	合計	17,200	(66.8%) 11,490	512,500	(78.1%) 400,500

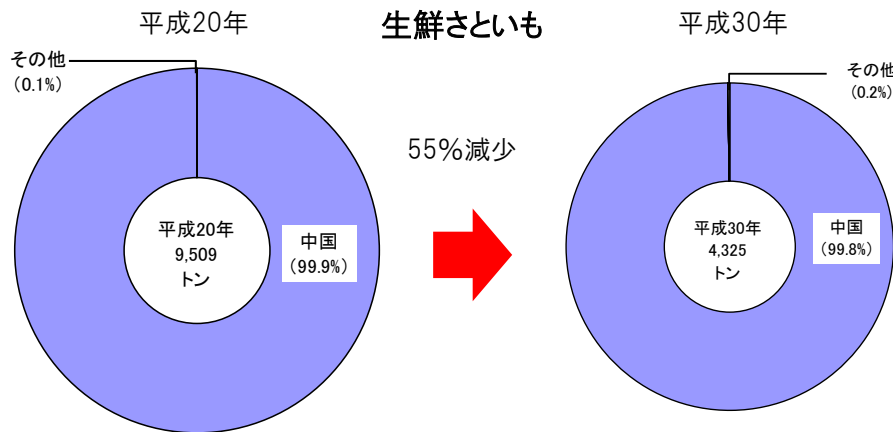
14 さといも

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、年々減少傾向し、平成30年は平成20年に比べて19%減少（平成20年22.8万トン→平成30年18.1万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で80%と近年8割程度で推移（平成20年は79%）。
- 国内生産量は減少（平成30年は14.5万トン、平成20年比で81%）。多くの県で減少する中、上位5県では、関西地域の主産地である愛媛県（同145%）及び埼玉（同111%）が増加。
- 平成30年の輸入量は、3.6万トンで平成20年に比べ25%減少。特に生鮮さといもの輸入量は55%減と大幅に減少。

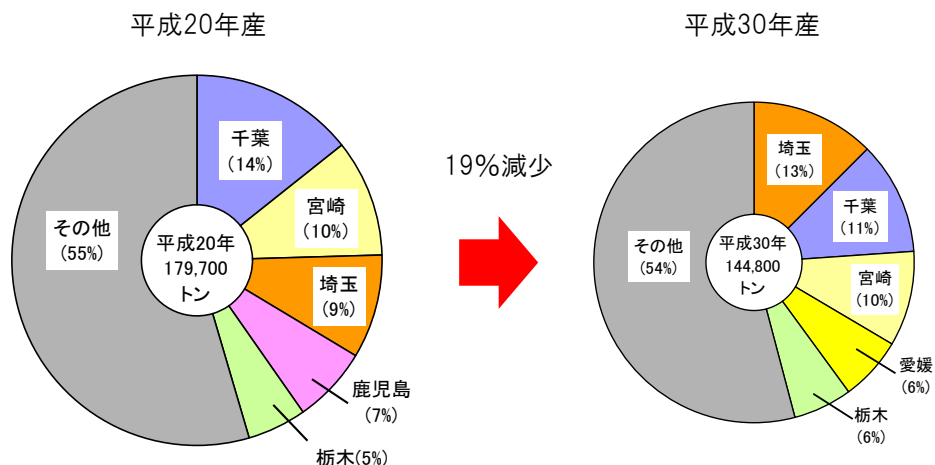
○ さといもの国内生産量及び輸入量の推移



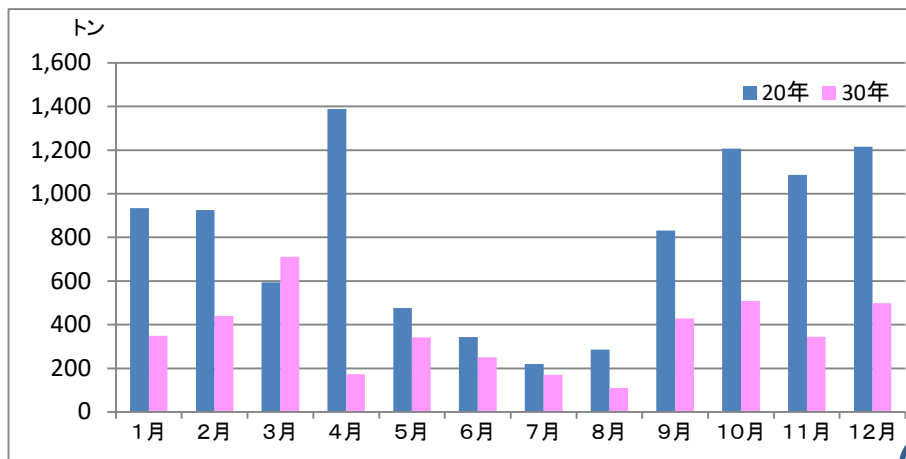
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



○ 国内生産量の比較（平成20年産及び平成30年産）

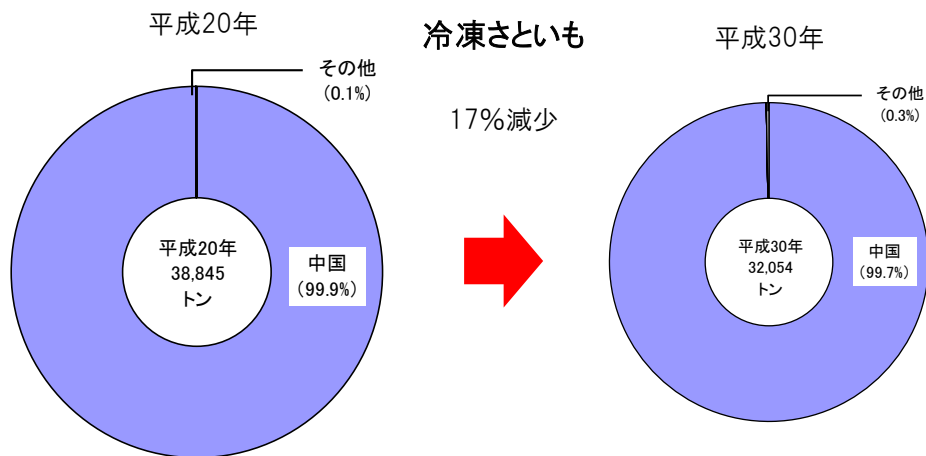


（生鮮さといもの月別輸入量）

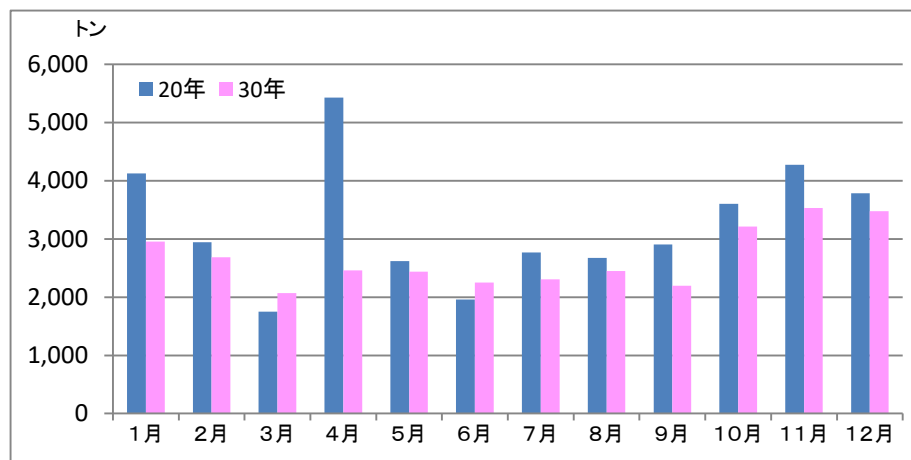


- 平成30年の冷凍さといもの輸入量は3.2万トンで、平成20年に比べて17%減少。中国国内での需要が増加したことも一因と考えられる。
- 平成30年の冷凍さといもの輸入価格（CIF価格）は187円/kgで、近年国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の6割程度。
- 輸入先は、ほぼ中国。中国内の賃金上昇や収穫量の減少による価格上昇等のため、内外価格差が大幅に縮小し、輸入量も減少。平成28年以降は輸入価格も落ち着き、190円/kg前後で推移。

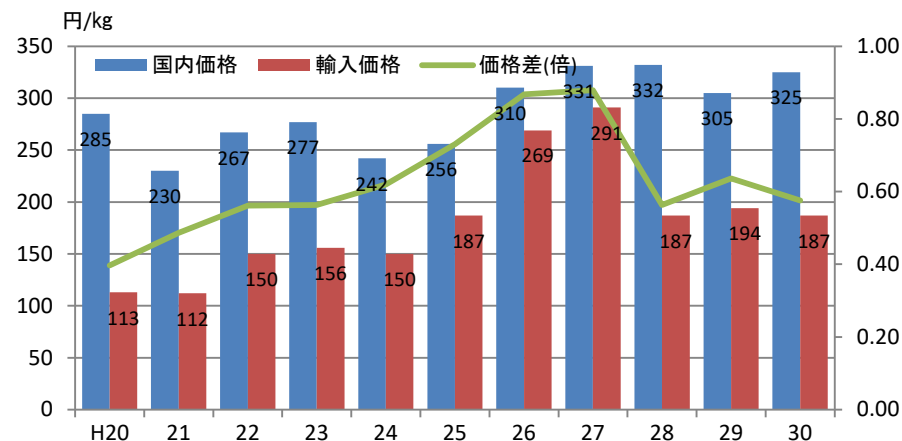
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



（冷凍さといもの月別輸入量）



○ 国産さといもと輸入さといも（冷凍）の価格の比較

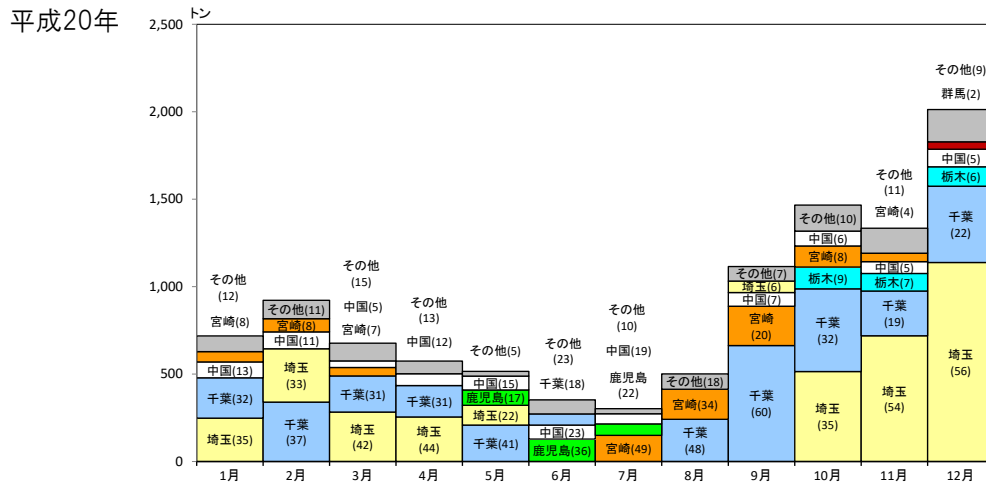


○ 国産さといもと輸入さといも（生鮮・冷凍）の出回り時期

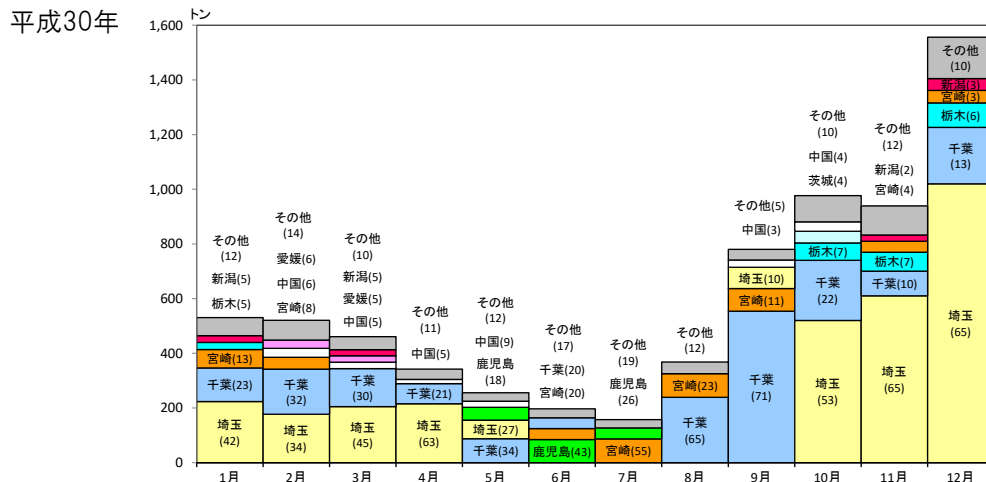
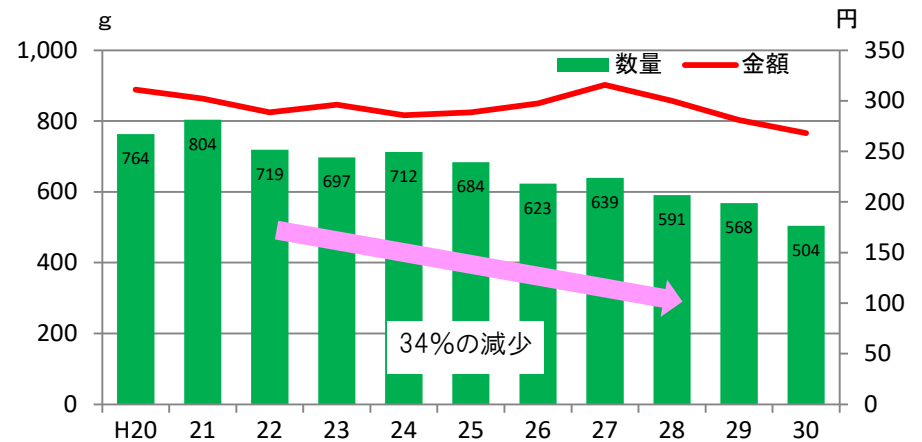
月 産地等	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
埼玉県	←→								←→			
千葉県	←→							←→				
宮崎県	←→						←→					
中国(生鮮)	←→											
中国(冷凍)	←→											

- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、7千トンで平成20年比べて大きく減少（平成20年比68%）。上位10県では、主産地の千葉県が平成20年に比べて60%程度、宮崎県が半減など多くの産地で減少しているが、その中で新潟県（同168%）及び関西中心の出荷である愛媛県（同136%）は大きく増加。
- 1人当たり年間購入数量は、年々減少傾向で平成30年は504グラム。価格が高めであることに加えて調理に手間がかかること等から、家庭での購入は冷凍さといもや冷凍調理食品などが増加。また、中食で調理食品（惣菜）を購入する傾向がみられる。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は66%（1,250ha）、出荷量は62%（15千トン）と大きく減少。また、平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で11%、出荷量で16%を占める。指定野菜の中で最も低い。

○ 東京都中央卸売市場の入荷量



○ さといもの年間購入数量と購入金額の推移で

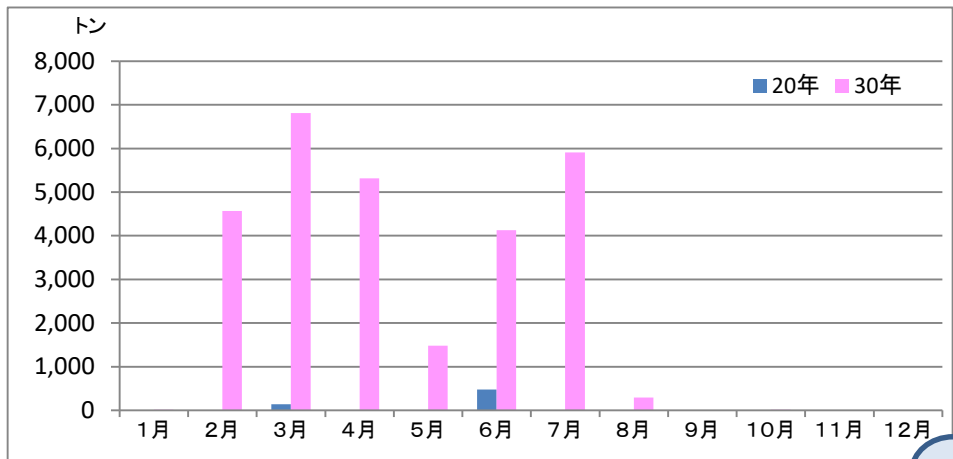
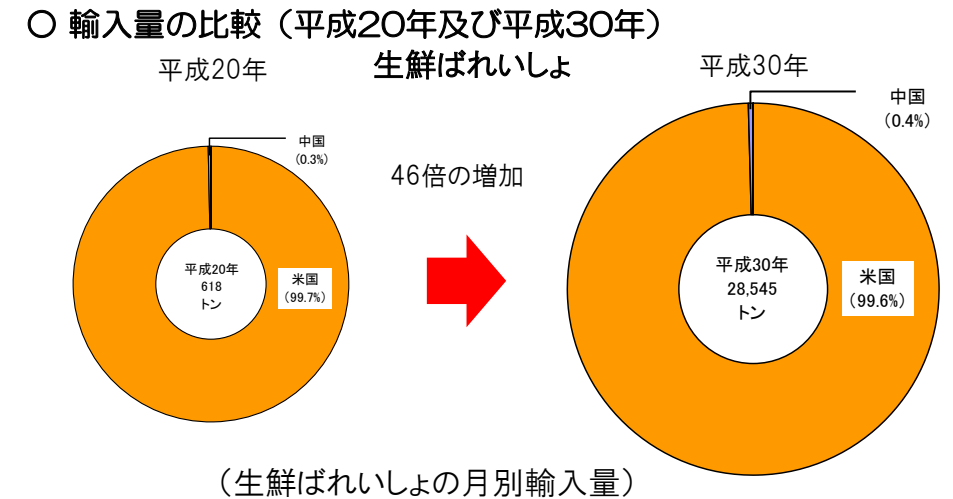
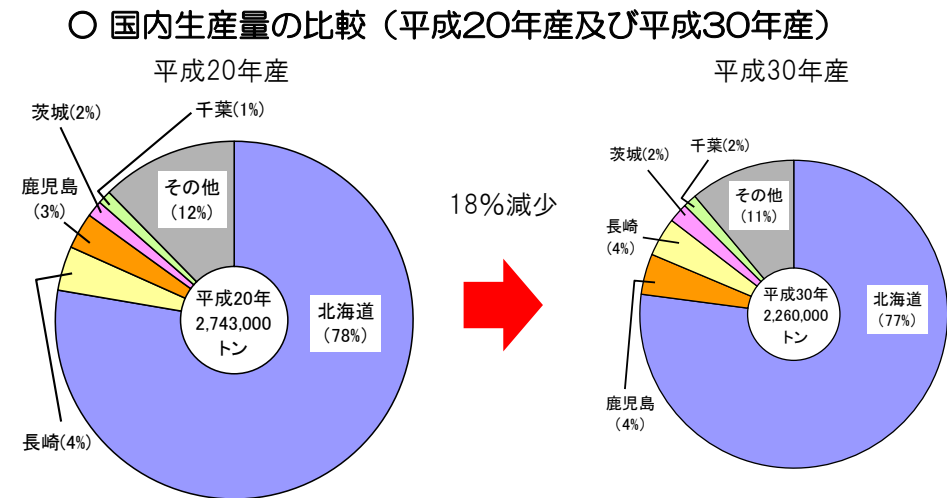
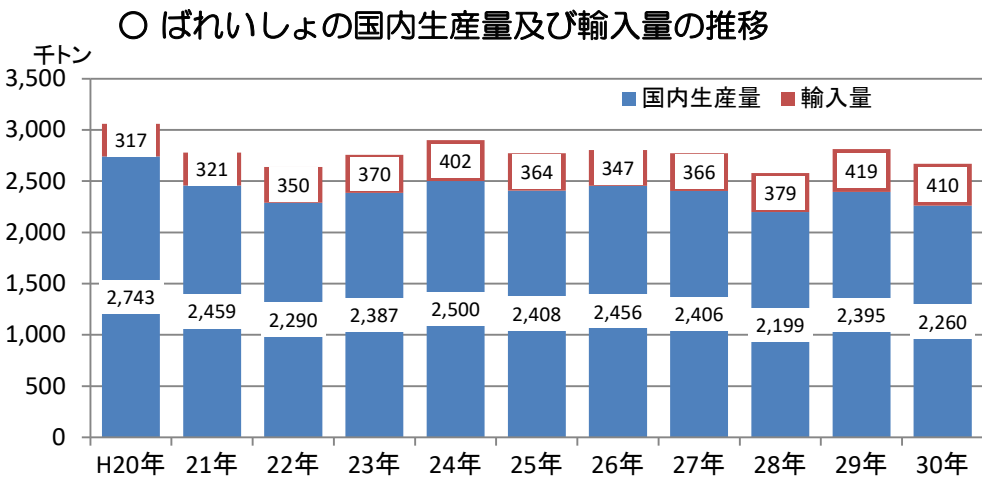


○ さといもにおける指定産地の位置付け

	平成20年		平成30年		(単位:ha、t)	
	作付面積		出荷数量		作付面積	
	全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地
秋冬	14,000	(13.4%) 1,880	110,000	(22.0%) 24,200	11,500	(10.9%) 1,250
冬春					95,300	(15.8%) 15,100

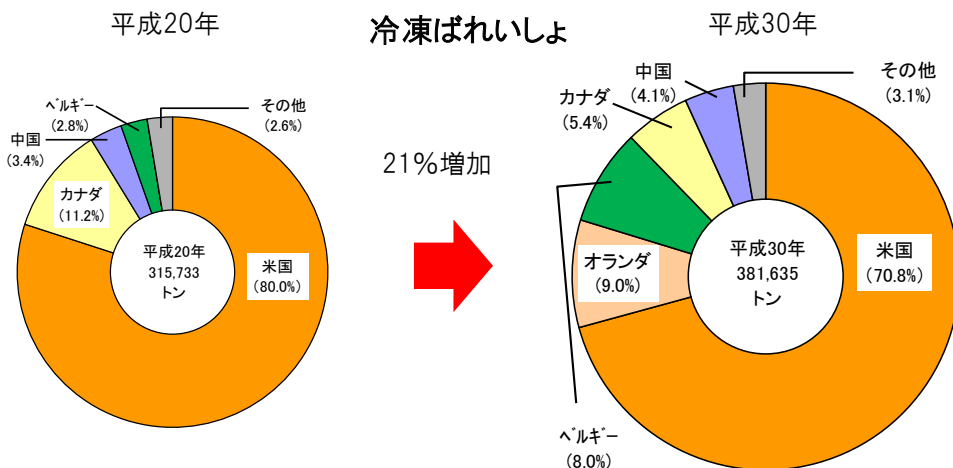
15 ばれいしょ

- 国内供給量（国内生産量＋輸入量）は、年によって増減はあるものの、この10年間で約2割減少（平成20年306万トン→平成30年267万トン）。
- 国内供給量に占める国内生産量の割合は、平成30年で85%と国産割合が低下（平成20年は90%）。
- 国内生産量は減少（平成30年は226万トン、平成20年比で82%）。生産量の8割弱を占める北海道をはじめ多くの県で減少する中、茨城県（同115%）及び鹿児島県（同107%）の2県のみが増加。
- 平成30年の輸入量は41万トンで、平成20年に比べて30%増加。平成18年の米国産ポテトチップ用ばれいしょの一部輸入解禁に加え、フライドポテトなどの冷凍ばれいしょの輸入が拡大したことが要因。

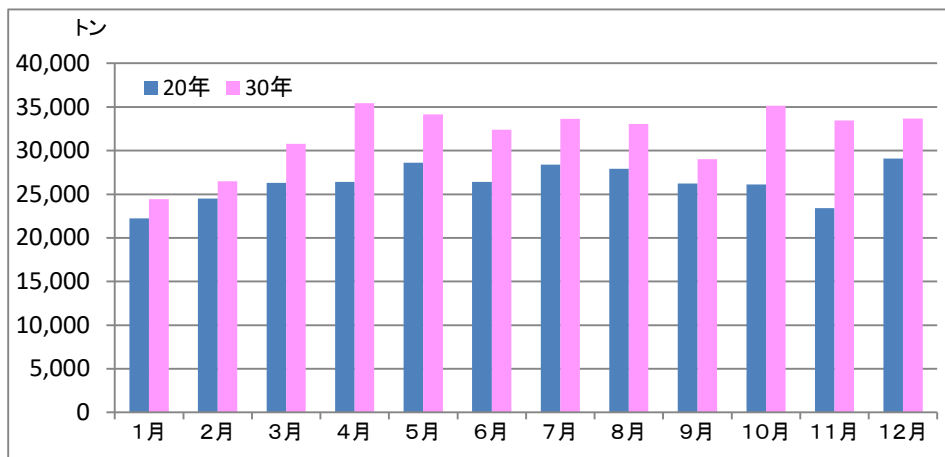


- 平成30年の冷凍ばれいしょの輸入は38万トンで、平成20年に比べて21%増加。米国を中心にオランダ及びベルギーから輸入され、ファストフードのフライドポテト等に使用。平成20年に比べてオランダ、ベルギーの輸入量が大きく増加。
- 平成30年の生鮮ばれいしょの輸入価格（CIF価格）は61円/kgで、国内価格（東京都中央卸売市場の卸売価格）の4割～5割程度。主にポテトチップ用として仕向けられており、国産加工用ばれいしょと競合している。

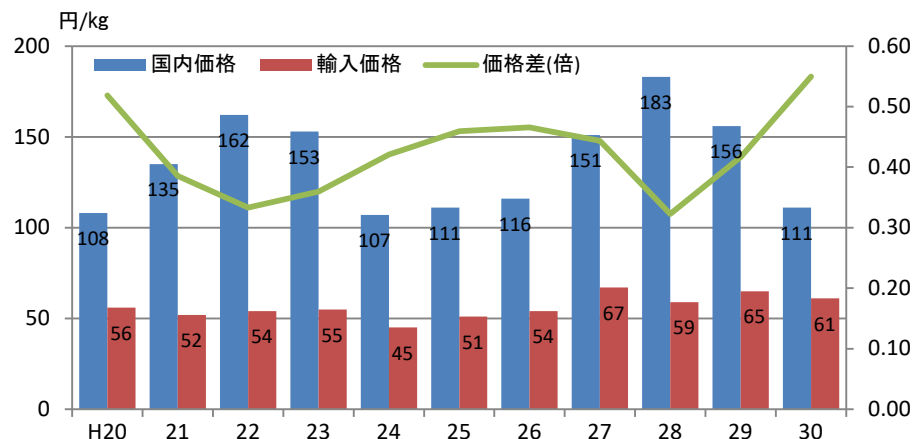
○ 輸入量の比較（平成20年及び平成30年）



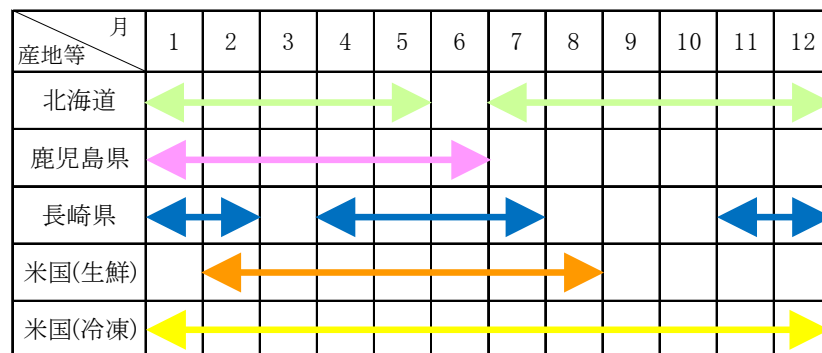
（冷凍ばれいしょの月別輸入量）



○ 国産ばれいしょと輸入ばれいしょ（生鮮）の価格の比較

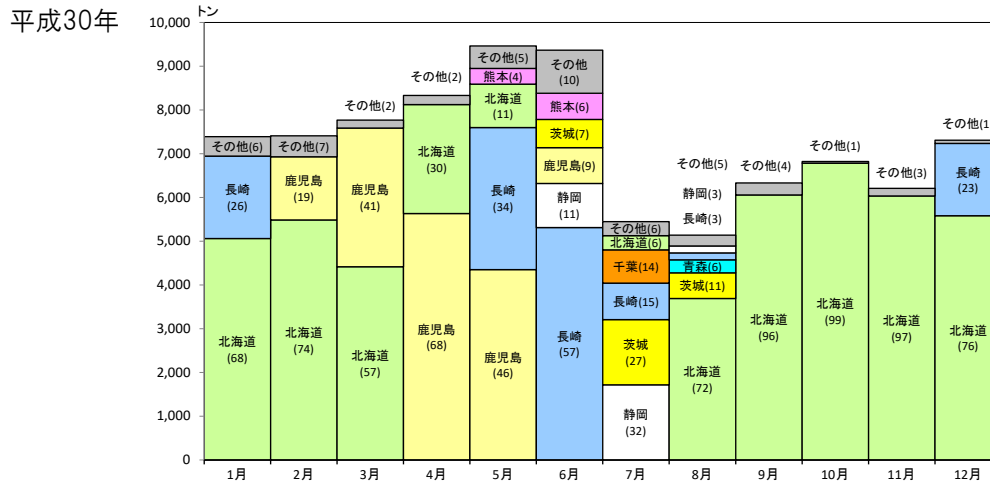
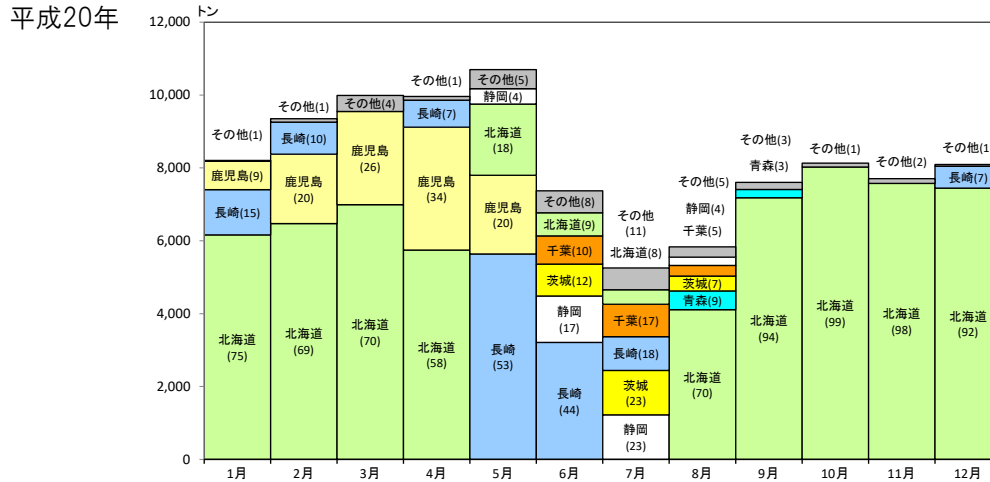


○ 国産ばれいしょと輸入ばれいしょ（生鮮・冷凍）の出回り時期

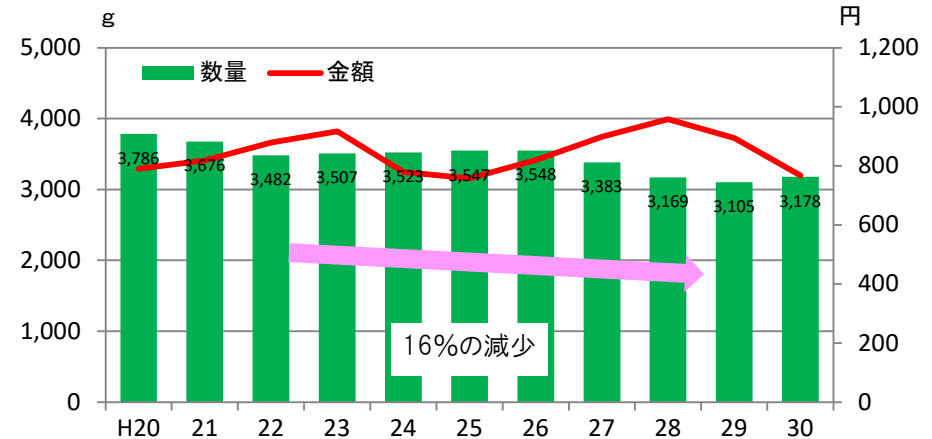


- 平成30年の東京都中央卸売市場入荷量は、8.7万トンと平成20年と比べて大きく減少（平成20年比87%）。北海道産が6月の長雨、日照不足、7月の降雨で高温等で小玉傾向になったことが要因。上位10県では、鹿児島県（同147%）及び熊本県（同129%）が大きく増加。
- 1人当たり年間購入数量は、近年減少傾向で平成30年は3,178グラム。ポテトサラダやフライドポテト（冷凍）の購入量は増加している。
- 指定産地について平成30年を20年と比較すると、作付面積は104%（58,300ha）、出荷量は94%（171.5万トン）。
- 平成30年の指定産地の全国シェアは、作付面積で76%、出荷量で91%を占める。出荷数量の割合は、たまねぎと並んで指定野菜で一番高い。

○ 東京都中央卸売市場の入荷量



○ ばれいしょの年間購入数量と購入金額の推移



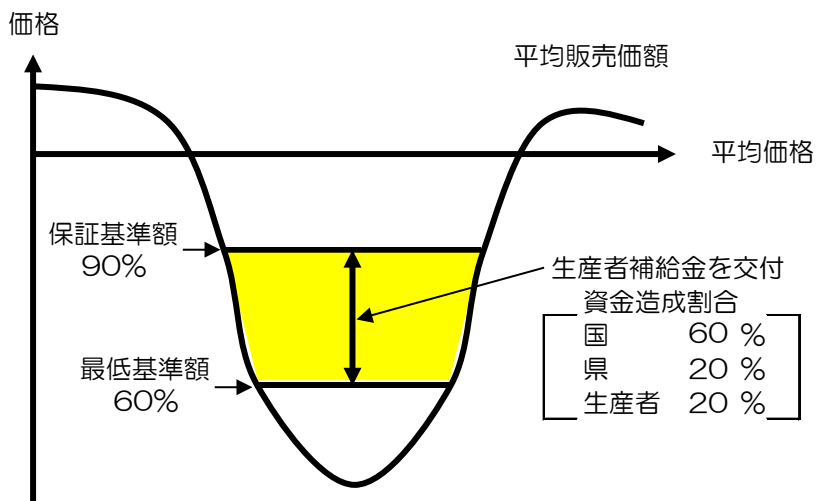
○ ばれいしょにおける指定産地の位置付け

平成20年		平成30年		(単位:ha、t)			
作付面積		出荷数量		作付面積		出荷数量	
全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地	全国	指定産地
84,900	(65.7%)	2,251,000	(81.0%)	76,500	(76.2%)	1,889,000	(90.8%)
	55,800		1,823,000		58,300		1,715,000

(参考) 野菜価格安定制度の概要 (昭和41年創設)

- 指定野菜（14品目）を消費地に安定供給する集団産地を「野菜指定産地」（全国で893産地）に指定し、生産者・県・国が積み立てた資金をもとに、指定産地から出荷された指定野菜の販売価格が過去6年平均の90%を下回った場合にその差額の9割を生産者補給金として交付。
- 野菜指定産地は、毎年、野菜の種別・出荷期間ごとに応じた「供給計画」を策定し消費地への安定出荷に取り組むとともに、天候不順等により主要露地野菜（キャベツ、はくさい、レタス、たまねぎ、はくさい、にんじん）の価格が著しく低落した場合は、早取りによる出荷の前倒し、出荷の後送り、加工用販売、フードバンクへの提供、一時保管、土壌還元等の緊急需給調整を実施。

○ 野菜価格安定制度の仕組み



※ 指定野菜（14品目）

キャベツ、きゅうり、さといも、だいこん、トマト、なす、にんじん、ねぎ、はくさい、ピーマン、レタス、たまねぎ、ばれいしょ、ほうれんそう

○ 野菜指定産地による需給・価格安定対策

平時	・ 生産者供給計画の作成(計画と実績の乖離に応じて生産者補給金を減額)
価格高騰時	・ 出荷の前倒し、計画出荷要請・勧告(国・県)
価格低落時	・ 出荷の後送り、加工用販売、フードバンク、一時保管、土壌還元 ・ 生産者補給金の交付(農家経営安定による次期作の確保)

○ 野菜指定産地の位置付け

	全国 (A)	指定産地 (B)	(B)/(A)
指定野菜の出荷数量	929 万t	637 万t	69%
指定野菜の作付面積	31 万ha	17 万ha	54%
指定野菜の収穫農家戸数(延べ)	110 万戸	13.9 万戸	13%
野菜農家の経営規模(1戸当たり)	指定産地外 0.16ha	指定産地 1.2ha	約8倍

出典：「平成30年野菜生産出荷統計」、「2015農林業センサス」